東亞問題調査會

〔事務所〕東京市麴町區有樂町（東京朝日新聞社內）
電話丸ノ內（23）〇一三一—〇一四一

朝日新聞社側

會長　緒方竹虎
常任幹事　大西齋
幹事　吉田淳　知識眞治　益田豐彥　太田宇之助　嘉治隆一

來賓（順序不同）

外務省東亞局長（交渉中）
同　情報部長　河相達夫
大藏省理財局長　大野龍太
拓務次官　安井誠一郎
企畫院次長　青木一男
對滿事務局次長　原邦道
大本營陸軍部課長　陸軍大佐　渡左近

同　課長　陸軍大佐　川俣雄人
陸軍省課長　陸軍大佐　影佐禎昭
同　情報部長（交渉中）
大本營海軍部海軍大佐　山田定義
同　海軍大佐　志波國彬
海軍省軍事普及部課長海軍大佐　山崎重暉
滿鐵東京支社長　岡田卓雄
三菱經濟研究所常任理事　長岡德治
三井合名會社理事調査部長　福島喜三次
東亞研究所副總裁　男爵　大藏公望
東京帝國大學教授　法博　高木八尺
朝日新聞社客員　經博　根岸佶
朝日新聞社社友　法博　下村宏
同　神田正雄
朝日新聞社顧問　法博　米田實

組織

朝日新聞社長に直屬、獨立せる同社の一機關。社外よりも各界の權威を『來賓』として網羅す

目的及事業

東亞に關する資料の蒐集、調査研究、整理、保存を掌る

沿革及既往事業

昭和九年九月十六日創立、まづ滿洲國を中心に、之と隣接する東亞方面の政治、外交、經濟、社會の諸事情の調査研究より開始し、一方、在外社員の通信情報により常に最新精密の資料と知識とを用意するとゝに、廣く此の問題に就ての權威者を社外にも求め、以て研究の完全周到を期しつゝ毎月一回の例會、隨時に時事問題を扱ふ臨時會議等を重ね、また時局に關する調査資料を都度刊行し事業の普及を圖りながら現在に到る

十三年度主要事業

(一) 『朝日東亞年報』 昭和十三年版刊行、十三年版も前年公刊の年報と大體同一の要領によつて編纂されてゐるが、支那事變の進行を反映して、內容的には著しく變更された。殊に第二部はあげて支那事變一年誌にあてられ、軍事行動の進展、新政權の誕生と發展、事變と支那經濟、事變と外交等各方面から詳細な解明檢討が加へられてゐる

(二) 『朝日東亞リポート』 の刊行

(イ) 香港・海南島

(ロ) 滿洲移民地視察報告

日獨協會

〔事務所〕 大阪市北區堂島濱通三丁目（鹽見理化學研究所內）
電話 福島 五〇一

役員

會長	醫博 佐多愛彥
副會長	カ・ア・バルザー
常務幹事	勝本鼎一
會計幹事	竹內萬兵衞
幹事	影山銑三郎 醫博 和田豐種 醫博 小澤凱夫 オット・シエフアー ア・リースフエルト

組織

日獨兩國人の會員組織　會員 五〇〇名

目的及事業

日獨文化の扶殖と產業の助成とを以て目的とす。本會は通常年四回之を開く

沿革及既往事業

歐洲大戰前、獨亞協會として存在したところ、大戰の爲め中絕したのを、大正十年十二月、日獨協會の名稱の下に再興創立し現在に至る。創立以來、獨逸より來朝の名士の招待會、並に邦人の獨逸より歸朝者等の招待講演會等を開催し、獨逸練習艦來航の節は其の乘組員の歡迎會を開き、又日獨音樂會等を催し、或は獨逸貧民救濟資金の寄附を爲す等、日獨親善に寄與し來る

十三年度主要事業

(一) 皇軍戰病死者遺家族慰問金を寄附す (二) 在獨逸人貧民救濟金を寄附す (三) ウーレンフート博士歡迎會を催す (四) 滿洲國公使に榮轉のワグナー博士の送別會を催す (五) 十一月二十一日防共協定二周年記念祝賀會並に獨逸大使及バルザー總領事新任祝賀會を催す (六) ヒットラー・ユーゲント歡迎會を催す (七) 十二月ワイナハト祭を開催す

國際法學會

〔事務所〕東京市本郷區（東京帝國大學法學部研究室内）
電話（帝大）小石川（85）五三五八（構内三四五）

役員

評議員兼編纂委員
法博 山田三良
法博 立作太郎
法博 神川彦松
横田喜三郎
江川英文
安井郁
（外一〇名）

評議員 一八名

組織

會員組織

會員 約二五〇名

會員を次の三種に分つ

名譽會員
終身會員
通常會員

名譽會員は、本會または學會のために特別の功勞ある會員中より、總會に於て推擧されたるもの

終身會員は一時會費五十圓、通常會員は毎年五圓

目的及事業

國際公法、私法及び外交に關する理論を研究し、學會の性格に違はざる方法によりその實行を期するを以て目的とす

この目的を達するため月刊『國際法外交雜誌』を發行して、これを會員に配付し、一定數の學校及び圖書館に寄贈する外、一般公衆に發賣する

沿革及既往事業

明治十三年創立、今日までに爲し來つた事業を概括すれば次の通り

（一）年二回（及び臨時）の總會並に例會に於て、國際法上の問題を研究す
（二）明治卅五年より毎月一回『國際法雜誌』を發行
（但し六月、八月休刊）
（三）大正元年より之を『國際法外交雜誌』と改題、引續き發行
（四）昭和八年より毎年一回研究會を開く

十三年度主要事業

（一）春秋二季の總會（學士會館）
（二）十三年度研究會開催（學士會館）
報告立命館大學教授　田中直吉
「ビスマルクの同盟協商體制」
東京帝國大學助教授　安井郁
「國際法と國内法の關係」

日滿文化協會

〔事務所〕滿洲國新京大同大街（大興ビルディング內）
分會　東京市麴町區下六番町五番地
電話九段（33）〇四九六
同　京都市上京區大宮田尻町五二番地

役員

滿洲側

名譽會長　張景惠
副會長　賈熙璞
理事　王季烈
顧問　阮振鐸
評議員　熙洽　吳廷燮　溫肅　葉玉麟　筑紫熊七　黑田源次

會長　羅振玉
常任理事　榮厚　丁士源　許汝棻　袁金鎧　沈瑞麟　臧式毅　黃允中　曾恪　伊里春　田邊治通　星野直樹　皆川豐治　坪上貞二

日本側

副會長　子爵岡部長景
理事　文博服部宇之吉　文博羽田亨

常任理事　文博池內宏　文博白鳥庫吉　文博狩野直喜　水野梅曉

評議員　工博伊東忠太　文博市村瓚次郎　原田淑人　理博小川琢治　文博新村出　溝口禎次郎

主事　文博矢野仁一　杉村勇造

組織

會員　四六名

目的及事業

日滿兩國の學界共同して東方の古文化を保存、發揚するを以て目的とす

沿革及既往事業

昭和八年（大同二年）十月、滿洲國新京に於て創立發會式を擧ぐ。以來事業の主要なるものを數ふれば次の通り

（一）創立と共に計畫された清朝實錄の出版（四、三六〇卷）は、昭和十一年（康德三年）末に完了す　（二）昭和九年（康德元年）以來、熱河の避暑山莊、及び八大寺の建築調査を開始す（その結果、昭和十三年度よりこれが應急修理に着手することとなる）（三）奉天なる滿洲國立博物館の建設に協力し、昭和十年（康德二年）六月開館す　（四）滿洲國展の基礎を確立す　（五）國民文庫を順次繼續刊行す　（六）滿洲地圖の蒐集、及び研究　（七）滿洲國皇帝陛下訪日宣詔紀念美術展覽會の開催　（八）滿洲國に存在する古文書の蒐集　（九）同古蹟の調査　（一〇）蒙古事情の調査

十三年度主要事業

（一）第一年度國民文庫十册を刊行す　（二）第一回滿洲國美術展覽會を後援　（三）美術工藝文學音樂の各種團體を援助政府との連絡を緊密ならしむ　（四）國內博物館圖書館事業に對する援助　（五）各種講演會に講師派遣　（六）滿蒙史論叢金代女眞の研究外滿洲史關係論文の出版　（七）薩爾滸碑亭の修築　（八）熱河建築映畫の撮影　（九）外國文化關係者の招待及國外文化宣傳　（一〇）政府關係各種展覽會の援助及日滿支書道展其他學術展覽會の開催

日墨協會

〔事務所〕東京市牛込區余丁町八〇番地
電話四谷（35）四一七一

役員

名譽會長　本邦駐劄墨西哥特命全權公使
會長　森山慶三郎
評議員　朝吹常吉　淺野良三　百武三郎
侯爵細川護立　各務鎌吉　永野修身
田中靜彦　侯爵大隈信常　男爵大倉喜七郎
侯爵西園寺公望　山下亀三郎　（其他合計　三五名）
理事（常任）小林武麿　淺間龍藏　井上雅二
大谷登　山縣武夫　渡邊直達
（其他合計　一五名）

組織

會員組織　會員　二七一名

目的及事業

日墨兩國民相互の親善を圖り、其の福利を增進するを以て目的とす

この目的達成のため次の事業を行ふ
（一）墨西哥に關する諸事項の調査研究
（二）日墨兩國の事情を相互に紹介し、且つ事業の啓發に資す
（三）日墨間を往來する人士に對し便宜供與

沿革及既往事業

大正十三年十月、元駐日墨國公使（現外務大臣）エドワルド・ヘイ將軍、現會長森山海軍中將等の發起にて創設、以來爲し來つた事業次の通り
（一）日墨間を往來せる人士に對して其の都度歡迎、送別會を開催
（二）定期總會開催（毎年春秋二回）
（三）講演會
（四）墨國事情報告會等
（五）會報の發行

十三年度主要事業

（一）四月六日　墨西哥公使官一等書記官「アルカラス・トルネル」氏送別會（於東京水交社）
（二）六月二十二日　第二十七回通常總會開催（於東京水交社）
（三）九月六日　本邦駐劄墨西哥特命全權公使「フランシスコ・ホータ・アギラール」將軍送別會並に新任横濱駐在墨西哥領事「ベルナルド・バーチス」博士歡迎會開催（於東京水交社）
（四）十二月十四日　第二十八回通常總會開催、役員改選（於東京水交社）

財團法人 日獨文化協會

〔事務所〕 東京市麴町區日比谷公園二番地（市政會館內）
電話銀座（57）三〇四一

役員

會長　侯爵　大久保利武
名譽顧問　駐日獨逸大使　陸軍少將　オイゲン・オット
評議員長　法博　男爵　松岡均平
理事長　文博　高楠順次郎
理事　一九名
監事　本田弘人
主事　東京文理科大學教授　友枝高彥
評議員　四八名

組織

財團法人

目的及事業

日獨文化の協同、及び相互普及を圖るを以て目的とす。この目的を達成する爲め、主として次の事業を行ふ

（一）日獨文化研究者に對する諸般の仲介
（二）獨逸に於ける諸施設の調査に對する仲介
（三）日獨兩國に於ける特殊科學の研究、及び紹介

阪井德太郎
ドクトル・ワルテル・ドオナアト

（四）日獨文化に關する研究資料の蒐集、展覽、及び出版
（五）獨逸文化の研究に關する會合、及び講演
（六）其他理事會に於て適當と認むる事業

沿革及既往事業

維新以來、我國が泰西文明の移植を爲したるものゝうち、獨逸のそれに負ふところは頗る多い。然るに我が國人が彼國を詳知すべき機關、また彼國人が我國を理解するによき施設といふものが無いのをお互にかこちつゝあつた大正の末期、獨逸では『日獨親善の一方法として兩國の文化連絡機關を伯林に設け、國內の官廳、研究所と連絡を保つて來訪の日本人にあらゆる便宜を與へ、一面日本の學術制度等に關する材料をこゝに集めて置いて獨逸の日本文化研究者の便を圖らう』との議が起り、大正十五年四月から政府の補助によつて生れた社團法人『獨逸及び日本の精神的生活、及び公的施設の相互的理解促進協會』（略稱『日本學會』）が、この使命下に事業を開始した。これに呼應して翌二年六月子爵後藤新平氏主宰のもとに生れたのが本協會である。爾來爲し來つた事業中の主要なるものを擧ぐれば次の通り

（一）昭和四年（イ）ツエッペリン伯號飛來したるに付、關係諸團體と合同、獨逸大使館に於て歡迎會を開く（八月）（ロ）ハンブルグ大學總長ラートゲン博士記念像募金（同月）（ハ）日獨文化に關する出版四種（二）ミュンヘン大學デスター教授講演（十月）
（二）同五年（イ）ケーニグスベルグ大學グラーゼナップ教授講演（ロ）主事ドクトル・グンテルト氏を文化交換の目的を以て獨逸へ派遣す（ハ）伯林大學日本語教授シヤール・シュミット氏來朝歡迎（九月）（二）出版物二種
（三）同六年（イ）ヒルシュフエルド教授、ロールバッハ教授、歡迎座談會（ロ）デイーク博士感謝歡迎會（七月）（ハ）エッツドルフ孃歡迎會（九月）（二）ゲーテ百年祭記念演奏會（ホ）出版物三種
（四）同七年（イ）獨逸建築工藝展覽會（五月、上野松坂屋）（ロ）ゲーテ百年祭記念展覽

會（同月、三越）（ハ）日獨學生交換の交渉開始（十月）（ニ）ゾルフ博士古稀祝賀（十月、金蒔繪文庫其他を贈る）（ホ）出版物『ゲーテ研究』其他

（五）同八年（イ）支那版畫展覽會（ロ）日獨學生交換いよ〳〵次年度より實現と決定

（八）出版物六種

（六）同九年（イ）獨逸印刷藝術展覽會（五月、三越）（ロ）新興獨逸展覽會（十一月、白木屋）（ハ）日獨學生交換開始（ニ）出版七種

（七）同十年（イ）シーボルト展覽會（四月、東京科學博物館）（ロ）獨逸國情展覽會（六月、京都大丸）（ハ）日獨學生懇親機關開設（ニ）出版七種

（八）同十一年（イ）嵯峨天皇宸影奉展（四月、日本美術協會）（ロ）嵯峨天皇宸影奉還祝賀會（同月、華族會館）（ハ）故ゾルフ大使追悼會（同月、築地本願寺）（ニ）出版七種

（ホ）シーボルト文獻出版開始（ヘ）シュプランガー、ドオナアト兩氏講演數回

（九）同十二年（イ）獨逸の國寶たる素描展覽會（五月、東京府美術館）同時に之に關する講演會（ロ）日獨文化資料展覽會（十一月、早大演劇博物館）同時に之に關する講演會（ハ）本協會創立十周年記念講演會（六月、一橋講堂に於て）（ニ）この外、シュプランガー、ドオナアト兩氏の隨時講演等

十三年度主要事業

（一）「シーボルト研究」出版（岩波書店發行）

（二）大獨逸國展覽會（九月東京日本美術協會、十一月大阪市美術館、十四年一月以後名古屋、金澤等に於て）

（三）日本古美術展覽會準備（國際文化振興會と協力して昭和十四年二月より三月まで伯林に於て開催）

（四）交換教授としてミュンヘン大學教授ケルロイテル氏來朝講演

（五）獨逸兒童作品展覽會

日露協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目七番地
電話銀座（57）三三五〇

總裁　閑院宮載仁親王殿下

役員

會頭（缺員）　副會頭（缺員）

理事　稲垣三郎　橋本虎之助　大橋新太郎　加藤寛治　田中清次郎　倉知鐵吉　八杉貞利　關根齊一

組織

主事

會員組織　會員　三三〇名　（支部所在地）　大連、敦賀

目的及事業

露國の學術及び事情の研究、滿洲國哈爾賓に『哈爾賓學院』（舊稱日露協會學校）の經營

沿革及既往事業

明治三十九年四月創立、同四十五年閑院宮殿下を總裁に奉戴す。大正九年九月、哈爾賓に日露協會學校（現在哈爾賓學院）を設立經營し現在に至る

十三年度主要事業

（一）十三年四月、本會經營の哈爾賓學院に第十九期新入生六十三名入學す

（二）十四年三月哈爾賓學院第十七回卒業生四十八名を出す豫定

財團法人　日華學會

〔事務所〕東京市神田區西神田二丁目二番地七
電話九段（33）一〇六一　四〇四八

役員

會長　侯爵　細川護立　　侯爵　細川護立
理事（常務）　砂田實　　白岩龍平
　　内藤久寛　　門野重九郎
　　江口定條　　杉榮三郎
　　文博　服部宇之吉　　法博　安川雄之助
　　山井格太郎
東亞校學監　赤間信義
監事　堀啓次郎　　兒玉謙次
顧問　伯爵　清浦奎吾　　田所美治
評議員　四三名　　江庸
主事　高橋君平（外三名）

組織

財團法人

目的及事業

中華民國人、並に滿洲國人のため、教育上の施設を爲し、且つ諸般の便宜を圖るを以て目的とす

この目的を達する爲め次の事業を行ふ

（一）留學生の爲に豫備教育機關を施設すること
（二）留學生の宿舍に關し便宜を圖ること
（三）留學生の實地練習、及び見學等の紹介に關すること
（四）教育技藝等に關して研究調査を爲さんとする者に對し便宜を圖ること
（五）留學生の入學、轉學等の紹介に關すること
（六）留學生の在學せる各學校、並に教育者間の聯絡を圖ること
（七）右の外、本會の目的を達するに必要なる事業

沿革及既往事業

大正七年四月、中華民國留學生の爲めに、學修上のあらゆる便宜を圖るべく、小松原英太郎氏を會長として設立されたのが本會である。（基金は、嘗て澁澤榮一子等によつて組織されて居た留學生同情會の殘金三萬七千餘圓と、内藤久寛氏より寄附の一萬圓とを以てす）

最初の事業の主要なるものは、同七年本郷區湯島天神町に第一中華學舍を設けたことで、同九年には引續き同區追分町に第二中華學舍を設け、かゝるうち漸次民間寄附金、國庫補助金等もあり同十年には財團法人として基礎を固め機構、事業も逐年擴大した

主要事業を擧ぐれば次の通り

（一）大正十年、一高、東京高師、東京高工等の特設豫科廢止問題起りたる時、繼續存置運動を爲し圓滿解決
（二）同十一年、留日中華基督教青年會館修理費に一萬圓寄附、更に四萬圓を募金して贈る
（三）同十二年の大震災に當り民國留學生の救護に萬全を盡す。希望により送還方法を講じ歸鄉せしめたる者四百五十餘名。またこの大震災により横死せる留學生廿五名のために招魂碑を建立す

（四）大正十四年、東亞學校（當時の名稱は東亞高等豫備學校）の經營開始
（五）昭和三年度には缺費省出身留學生百九十名の救濟方法を講ず
（六）『日華學報』の發行、留日學生名簿、留學生入學試驗問題集、日本各學校留學生入學要覽等の刊行、其他臨時の出版種々
（七）中國名士、學者の講演會（來朝の際、隨時）
（八）講習會（一は日本人に對するもの、支那語、支那時文講習會の如き。一は留學生に對するもの、產業組合事業に關する講習の如き）
（九）東亞學校に昭和十一年度より高等科を設く

十三年度主要事業

（一）寄宿舍在舍學生數
（イ）十二月現在＝東亞寮（三二人）平和寮（臨時に支那警察留學生收容中）中野女子（一〇人）翠松寮（一四人）白山學寮（一一人）計六七人
（ロ）過去一ヶ年間收容延人員總計　五九四人
（二）視察旅行の爲め渡來し、本會に宿泊せる中國人數
（イ）十二月現在　三人
（ロ）過去一ヶ年間宿泊延人員總計　八一一人
（三）館山夏期寄宿舍を開く（七月—八月）
（四）刊行物　日華兩文日本見學旅行要覽（八月廿五日發行）、十三年六月現在中滿留日學生名簿（十月三十日發行）、日華學報　二月號、三月號、六月號、八月號、十月號、十二月號を發行す
（五）支那語、支那時文講習會開催　第十六回（四月—七月）、第十七回（九月—十二月）
（六）東亞文化協議會事務所（東京）を外務省の依頼に因り九月二十七日本會內に設置す
（七）東亞學校在學者數（十二月現在）中華民國九三、滿洲國七六、蒙疆六、合計一七五名

日洪文化協會

（事務所）東京市麴町區丸ノ內二丁目一〇番地（仲一四號館內）
電話丸ノ內（23）五七五〇

役員

會長　男爵　三井高陽
理事　市河彥太郎　本田弘人　白鳥清
西郷從吾　武村忠雄　青木節一
常務理事　吉村正

組織　會員組織

目的及事業

日本洪牙利兩國間の文化の交換協同を促進し以て兩國民相互の理解親善に貢獻することを目的とす。この目的を達成せんが爲に次の事業を行ふ（一）日洪兩國民の民族學的研究（二）日洪兩國間の教授藝術家學生等の交換（三）講演會音樂會映畫會展覽會其他諸會合の開催（四）日洪文化に關する圖書其の他の研究資料の蒐集展覽交換及寄贈（五）日洪文化に關する諸般の事業の斡旋及研究の奬勵（六）會報の發行及著書論文の飜譯出版（七）其の他理事會に於て適當と認めたる事業

沿革及既往事業

昭和十三年二月男爵三井高陽氏及び當時外務省文化事業部第三課長たりし市河彥太郎氏の主唱の下に外務省助成團體として成立す

十三年度主要事業

（一）ハンガリー文化使節メゼイ氏の歡待（二）メゼイ氏述「ハンガリー人の見た日支事變」パンフレットの發行（三）日洪文化協會彙報の發行（四）吉川兼光氏著「友邦ハンガリー」版出補助（五）日洪關係に關する講演會の開催

日本西班牙協會

(Sociedad Hispano-Japonesa de Tokio)

〔事務所〕東京市赤坂區青山南町五丁目五〇番地（鍋島邸內）
電話青山（36）二五三〇

役員

會長　子爵　鍋島直和

副會長　伯爵　藤堂高紹　男爵　三井高陽

常務理事　エレラ大佐　金澤一郎教授　渡邊直達

主事　松平直國　伯爵　伊達興宗　ムニヨーズ教授
菊池盛太郎

組織

會員組織　會員　三〇名

目的及事業

日本人及西班牙人の交際を親密ならしむることを以て目的とし、次の事業を行ふ

（一）會報を發行すること
（二）倶樂部及文庫を設立し會員の使用に供すること
（三）講演會及音樂會を開くこと

沿革及既往事業

昭和十年二月六日華族會館に於て西班牙人と會合此協會を設立す。爾來爲し來つた事業中主要なるもの次の通り

（一）西語の發展に協力す
（二）ワルドマール伯爵來京に際し世話をなす
（三）西班牙國皇太子殿下及同妃殿下御來京に際し御歡迎申上げ且記念品を奉呈した
（四）東京外國語學校の金澤教授の銅像除幕式祝典に會長西語にて祝詞を述ぶ
（五）十二年十二月二日公使館の國旗の奉祝の式に會長參列す

十三年度主要事業

（一）サンチアゴ・メンテス・デ・ヴキーゴ公使の來京を更に出迎ふ
（二）十三年十一月、フアランヘ・エスパニヨーラ・トラヂシオンナリスタ・イ・デ・ラス・フンタス・オフエンシーバス・ナシヨナル・シンヂカリスタ駐日代表エレラ大佐よりジエネラン・フランコの寫眞を受領該國民全體黨と連絡す

東亞調査會

〔事務所〕東京市麴町區有樂町・東京日日新聞社內
電話丸ノ內（23）〇三二一　〇三三一

役員

會長　德富猪一郎
副會長　高石眞五郎
顧問　男爵　林權助
侯爵　細川護立
加藤寛治
男爵　鄕誠之助
光永星郎
主事　中保與作

林仙之
林銑十郎
大谷光瑞
法博　岡實
宇垣一成
公爵　近衞文麿
荒木貞夫
伯爵　清浦奎吾
廣田弘毅
松本鎗吉

組織

會員組織

目的及事業

本會は東方亞細亞諸國に關する政治、經濟、學術其の他各方面に亘る諸問題を調査研究し、必要に應じて其の結果を公表し、東亞に關する知識の普及を圖る外、或は當局に建議し、或は輿論を喚起し以て其の效果を擧ぐるを目的とす

沿革及既往事業

昭和四年一月一日設立、同年八月三日各調査部門及び委員を決定、同五年一月支那動時に於ける鐵道確保の件、治外法權に關する件、支那の排外排貨に關する件、吉會鐵道速要望の件、露領漁業問題の件等を決定、同七年九月二十二日、國際聯盟對策、承認後の滿洲對策、上海自由都市問題に就ての決定を行ふ

同八年六月十二日、インドの不當關稅問題に關する件に就ての決議を行ふ

以上の外隨時、各種の調査、各種の講演會を行ひ、一般の東亞に對する關心の昂揚と輿論の指導に努めたること一々こゝに枚擧する能はず

十三年度主要事業

（一）大倉喜七郎男のイタリー地方講演會を東日講堂で開催
（二）十月十日　政界各代表の時局對策座談會を霞山會館で開催
（三）十一月十日　滿洲國產業部大臣呂榮寰氏の滿洲產業開發五ヶ年計畫に關する講演會を東日五階大會議室で開催
（四）十一月廿日　中華民國維新政府代表、同臨時政府代表、蒙疆代表、滿洲國代表等五十餘名とともに、東日會館八階食堂に於いて東亞經濟ブロック結成に關する意見交換會を開催
（五）十二月二日　中華民國臨時政府湯爾和氏と德富會長と會見更生支那建設に關する隔意なき意見の交換を行ふ
（六）十二月九日　大毎取締役會長高石眞五郎氏（本會副會長）、東日總務久富達夫氏（本會理事）及び大毎特派員横田高明三氏の支那視察講演會を九段軍人會館に於いて開催

日獨協會

〔事務所〕東京市小石川區關口臺町一六番地
電話牛込（34）一二六六

總裁　伏見宮博恭王殿下

役員

名譽會長　獨逸大使　オイゲン・オット
會頭　侯爵　大久保利武
理事長　園田三朗
理事長事務取扱　森孝三
理事　小山松吉　子爵　井上匡四郎
男爵　三井高陽　西郷從吾
神重德　林春雄
ドクトル・コルブ　園田三朗
男爵　松岡均平　稻田龍吉
森孝三　ドクトル・ドナート
古莊幹郎　佐藤恒丸
友枝高彥　星一
バルト　佐多愛彥
ケルン　堀田正昭
安達堅造　高橋龍太郎
ザール　ドクトル・ウェークマン

組織

會員組織　會員　四〇〇名（獨逸人七〇名）

目的及事業

本會の目的は次の如し

（第一）日獨兩國人間の交際を親密ならしむること
（第二）日獨兩國に於ける學術及其他の事項を研究すること
この目的を達せんが爲めに漸次次の各項を實行するものとす
（第一）倶樂部及文庫を設立し會員の使用に供すること
（第二）講談會を開催すること
（第三）會報を發行すること
（第四）會員の爲諸般の便宜を與ふること

沿革及既往事業

明治四十四年設立、以來日獨兩國人の信交上多大の盡力をなし來る

十三年度主要事業

（一）ネーベル氏送別會（二）文化使節歡迎會（三）ヒットラー・ユーゲント歡迎會（四）オット獨逸大使新任祝賀會（五）コンドル機歡迎會（六）コルブ氏送別會等（七）この外時局論文飜譯紹介

日葡協會

〔事務所〕東京市京橋區銀座七丁目二番地一四・ヒアシビル内
電話銀座（57）〇〇七六　〇〇七七

役員

會長	男爵 三井高陽	
副會長	伯爵 寺島宗從	
理事	三井高大	
領事	ピント	武村忠雄
名譽會長	葡國代理公使 フレータス	
同會員	伯爵 藤堂高紹	
常務理事	有田秀造	

組織

會員組織にして、事業費は寄附、醵金其他に依り支辨す。追て財團法人組織にする事

目的及事業

日葡兩國間の文化に貢獻し並に相互の通商貿易に關する調査研究並に出版等

沿革及既往事業

當協會は曩に大正十二年、駐日葡公使ブランタン・バイス氏の時代に初めて創成された。同十四年四月、ジョゼ・カルネイロ氏着任して以來協會會長として伯爵松浦厚氏が選定せられた
昭和二年十二月、今より三百九十六年前即ち天文十一年夏葡人初めて日本へ渡來して兩國間に於て國際交通文化並に貿易の端緒を開發したる地なる大隅國種子ケ島に兩國親善紀念碑を建設した

十三年度主要事業

（一）昭和十三年五月男爵三井高陽氏會長に就任せられたるに據り協會の事務所を前記に初めて創設せらる
（二）曩に天文十一年以來肥前國長崎其他に布教並に文化に貢獻したりし「フロイス」氏の著述の日本史後編（葡文）の編纂出版を爲し江湖に發表並に寄贈、販賣に從事した
（三）尚既刊の出版冊子の販賣等に着手す
（四）更に左記の事業取調準備中である
（イ）「フロイス」日本史後編（邦文）刊行
（ロ）長崎市に日本最初の葡國「ミッション」上陸紀念碑建設に關する設計協議等
（ハ）日葡交通史編纂の件

日佛文化協會

〔事務所〕京都市左京區吉田泉殿町八番地
電話 上（3）一四三〇

役員

會長　佛國大使　シャルル・アルセーヌ・アンリー　織田萬
副會長　稲畑勝太郎　稲畑太郎
理事　佛國領事　ピエール・ドペール　杉山直治郎
　　アンリ・メルキオール
　　關西日佛學館長　ルイ・マルシヤン
監事　ジヤン・フアルジエ　今村新吉

組織

財團法人

目的及事業

日佛文化の接觸に資すべき事業をなすを以て目的とす
この目的を達する爲次の事業を行ふ
（一）教授及び講演を爲すべき建築物の維持、之を關西日佛學館と稱す
（二）佛國圖書の文庫の維持、之をポール・クローデル文庫と稱す
（三）講演會及び集會の開催

（四）佛蘭西事情の紹介
（五）其他日佛文化の接觸を容易ならしむべき各種の事業
◇〔關西日佛學館〕關西日佛學館は財團法人日佛文化協會の創立にかゝり
（一）フランスの言語、文學、科學其他一般佛國文化の研究をなし
（二）日佛文化親善のため兩國の學生、學者、諸專門家の接觸をはかるを以て目的とす

沿革及既往事業

昭和二年創立、所期の目的に盡し來る

十三年度主要事業

（一）關西日佛學館の事業即ち、佛語其他の教授
（二）公開講演會
（イ）六月四日「巴里の歴史」東京外語教授ノエル・ヌエット氏　（ロ）十一月十九日「プルタールニユ地方」同氏　（ハ）十二月十一日「言語の心理學的原理及び國民心理」關西日佛學館長ルイマルシヤン氏　（ニ）十二月十七日「藝術の爲の藝術、ピエール・ルイスの作品」ポール・イズレール氏　（ホ）昭和十四年一月廿一日「佛蘭西の印象」前外務大臣　佐藤尙武氏
（三）音樂會
（イ）六月十八日、日佛音樂の夕　（ロ）六月廿五日、グノーのフアウスト　（ハ）十月十六日佛蘭西の宗教音樂　（ニ）八月三十日、佛蘭西民謠（於輕井澤）（ホ）十二月十八日、十六七世紀のフランス音樂史（レコードによる）
（四）シネマ映寫會、其他

太平洋協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目七番地
電話銀座（57）一一八三

役員

副會長	松岡洋右	永田秀次郎
理事	阿部信行	中村良三
	櫻內幸雄	島田俊雄
	村田省藏	松江春次
	中野金次郎	八田嘉明
	笠間杲雄	
	山地土佐太郎	
監事	清水揚之助	

組織

會員組織

目的及事業

東西兩半球に跨る太平洋の諸問題を調査研究し、太平洋政策に關する國民の認識を深めて國論の基礎を固め、具體的政策の確立に依り之を國策の上に實現するを以て目的とす。この目的を達成する爲め次の諸事業を行ふ

（一）太平洋問題に關する政治、外交、文化、國防、經濟、通商、交通、產業、金融、資源、土地利用、人種、社會狀態等を調査研究し、之が對策を講ずること
（二）我國人口問題の解決、拓殖移民の方策、通商障害の排除、資源の公平なる分配、領土の平和的變更等に關して之が對策を講ずること
（三）太平洋諸國間の文化交換に必要なる方法を講ずること
（四）各種調査員の派遣、彼我牒報の交換、國情闡明に關する諸種の事項を遂行すること
（五）雜誌、圖書の發行、講演會の開催を行ふこと
（六）必要に應じ使節の派遣を行ふこと
（七）其の他必要と認むる事項を行ふこと

沿革及既往事業

官民の同志相寄り昭和十三年五月十一日東京會館に發會式を擧げ、直に實際活動に入る。同年度內の主要事業別記の通り

十三年度主要事業

（一）機關新聞發行（十三回）
（二）機關雜誌發行（二回）
（三）太平洋懇話會（六回）
（四）南洋委員會（二回）
（五）南洋群島慰問使派遣
（六）南洋群島へ向けニウス映畫提供二回

日本國際協會 太平洋問題調査部

Japanese Council, Institute of pacific Relations. (國際的正式名稱)

〔事務所〕 東京市麴町區丸ノ内二丁目一二番地
電話丸ノ内（23）四九三五

役員

協議員長	子爵 石井菊次郎	
副協議員長	法博 山川端夫	
協議員	岩永裕吉	門野重九郎
	法博 高木八尺	前田多門
	男爵 阪谷芳郎	農博 那須皓
	原邦造	法博 高柳賢三
	西園寺公一	伯爵 黒木三次
幹事		坂西利八郎
		法博 下村宏
		鷲見祐輔

組織

會員 六、七四一名（日本國際協會と合して）

（外六名）

協議員會（最高決議機關）——常置調査委員會（調査事業の遂行に關する諸般の審議に當る）
　　事務局（幹事一名、調査スタッフ若干名）
　　プログラム委員會（會議の議題及びプログラムの審議を行ふ）

太平洋會議準備委員會（東京・大阪其他の財界有力者及び各方面の專門家を以て組織す）

目的及事業

太平洋諸國民の相互關係改善の目的を以て其の諸事情を研究し、且つ諸國に設立せられたる同種の諸團體と協力することを以て目的とす

この目的達成の爲めに行ふ事業の主なるもの次の通り

（一）太平洋會議（正式名稱＝太平洋問題調査會國際會議）への參加

（二）太平洋問題調査會中央理事會への參加及び、その決議せる事業の分擔

沿革及既往事業

大正十五年四月『太平洋問題調査會』の名の下に創立され、インスチチユート・オブ・パシフイツクリレーションズ（Institute of Pacific Relations）の日本代表機關として、布哇、布哇、京都、上海、バンフ（加奈陀）、ヨセミテ（米國）の各太平洋會議に參加す。現在參加國十一ケ國。

昭和十一年三月、日本國際協會と合併して『部』と改稱す

その間に於ける事業の主なるものは次の通り

（一）右六回に亘る太平洋會議（一九二五年、一九二七年、一九二九年、一九三一年、一九三三

年、一九三六年）への參加、それに提出の英文データー・ペーパー（調書）の刊行
（二）右會議の報告書『太平洋問題』の刊行
（三）同報告講演會の開催
（四）他の諸國提出調書（若干）の飜譯
（五）諸種の科學的調査報告の刊行
（六）諸國の關係團體との不斷の連絡・通信（親善・融和のための諸工作）

十三年度主要事業

（一）調査事業として目下進行中のもの次の如し（イ）日本綿業調査（生産及消費に關する）（ロ）日本海運業調査（ハ）日本漁業調査（ニ）日本植民地開發調査（ホ）新聞及輿論調査（ヘ）日本外交政策の研究
（二）調査の一成果として本年度に刊行せられたるもの次の如し
那須皓編「本邦生活水準研究文獻目錄」（昭和十三年八月當調査部發行）
（三）在紐育太平洋問題調査會中央事務局にて企劃されたる「日支事變關係調査計畫」に關し英米其他のI・P・Rと折衝する爲め、昭和十三年七月協議員高柳賢三氏日本側代表として歐米に赴き交渉を續け十二月歸朝した
（四）前記調査計畫及び次回會議開催時期・場所・議題等を審議すべき中央理事會（紐育に於て十三年末より十四年一月初旬にかけ開催）に出席する爲め、協議員高木八尺氏日本側代表として十二月八日横濱出帆渡米した

チエツコスロバキヤ協會

〔書類取扱所〕東京市麹町區有樂町一丁目一〇番地
電氣化學工業株式會社內・金子武麿氣付
電話銀座（57）四五六一——四五六三

役員

會長　伯爵　酒井忠正
副會長　伯爵　柳原義光　伯爵　溝口直亮
理事　金子武麿

組織

會員組織

目的及事業

兩國々交親善及學術文化の親善

沿革及既往事業

昭和十二年日蝕觀測隊スローカ博士へ研究資金を贈呈し研究の助成をす

十三年度主要事業

特記すべき事業なし

國際學友會

〔事務所〕東京市淀橋區西大久保一丁目四五八番地
電話四谷（35）五五二六　七六〇六

役員

會長　公爵　近衛文麿

常務理事　渡邊知雄

理事（イロハ順）

外務省歐亞局長　井上庚二郎
帝國教育會理事　大島正德
國際文化振興會常務理事　子爵　岡部長景
法博　神川彥松
外務省亞米利加局長　吉澤清次郎
農博　那須皓
外務省東亞局長　栗原正
文部省專門學務局長　山川建
工博　山本忠興
文部省普通學務局長　藤野惠
外務省文化事業部長　三谷隆信
醫博　宮川米次
醫博　宮島幹之助

參與

外務省文化事業部第二課長　市河彥太郎
文部省普通學務局學務課長　岩松五良
外務省亞米利加局第一課長　石井康
外務省歐亞局第三課長　石澤豐
文部省專門學務局學藝課長　本田弘人
外務省東亞局第一課長　土田豐
外務省歐亞局第二課長　山田芳太郎
文部省專門學務局學務課長　有光次郎
外務省亞米利加局第二課長　澁澤信一

幹事

外務省文化事業部第二課長　市河彥太郎

組織

外務省助成團體

目的及事業

本會は學生を通じ國際文化の交換を圖り且在本邦外國學生の保護善導を圖るを目的とし次の事業を行ふ

（一）學生交換招致派遣竝に奬學金交付
（二）宿舍の供給（國際學友會館を設置經營す）
（三）日本語の敎授
（四）入學其他勉學上の斡旋
（五）講演見學其他啓發事業
（六）其他理事會に於て適當と認むる事業

沿革及既往事業

創立は昭和十年十二月、爾來爲し來つた事業次の通り

(一) 國際學友會館の創設　昭和十一年二月
(二) 交換招致派遣奬學金交付外國人學生六十二名（昭和十三年十二月現在）
(三) 國際學友會館在館外國人學生通計百十三名（昭和十三年十二月現在）
(四) 伯國リオ・デ・ヂヤネイロ工科大學學生視察團、チリー法科大學學生視察團及チリー農科大學學生視察團の助成
(五) 日本英語學生協會並に日米、日比學生會議の助成援助
(六) 其他啓發事業

十三年度主要事業

(一) 交換學生八名
(二) 招致學生十七名
(三) 奬學金交付學生二十九名
(四) 派遣學生五名
(五) 國際學友會館在館學生八十七名
(六) 國際學友會保健寮新築（清水市三保）
(七) 國際學友會夏期日本文化講座開催（於國際學友會保健寮）
(八) 見學旅行
(九) 講演會の開催、其他の啓發事業
(一〇) チリー法科大學學生視察團助成
(一一) 第五回日米學生會議の助成援助
(一二) 第二回日比學生會議の助成援助、等

東京汎太平洋倶樂部

〔事務所〕東京市麹町區永田町（貴族院内）
電話銀座（57）三九五五

役員

名譽會長	公爵 德川家達	侯爵 德川賴貞
名譽副會長	侯爵 前田利爲	エヴレット・フレーザー
會長	子爵 井上匡四郎	德川家正
副會長	トーマス・ベーテー	五斗欽吾
	田中館愛橘	武田圓治
理事	長世吉	笠井重治
	齋藤惣一	アール・エル・ダーギン
	富森長太郎	

組織

會員組織　會員約三〇〇名　本倶樂部は日本汎太平洋協會に屬す

目的及事業

太平洋沿岸諸國民の親睦を圖るを以て目的とす
本倶樂部は毎週金曜日に午餐會を開き及各地の汎太平洋倶樂部と連絡を保ち其の他必要と認むる事業を行ふ

沿革及既往事業

一九二三年四月廿一日創立、以來太平洋沿岸諸國の親善關係助長に盡し來る

十三年度主要事業

恒例會合其他

日語文化學校

〔所在地〕東京市芝區芝公園九號地三番
電話芝（43）三八六六

役員

名譽校長	男爵	阪谷芳郎
校長		ダーリー・グウンズ
國語部長		松宮彌平
文化部長		高柳賢三
幹事		松宮一也
理事長		ウイリアム・アキスリング
副理事長		村上直次郎
記錄理事	男爵	團伊能
會計理事		志立鐵次郎
理事		戸澤正保
		姉崎正治
		ラッセル・ダーギン
		オーガスタス・ライシヤワー
		山田三良
		ドナルド・ロス
		キルパート・ポールス
		ポール・メーヤー
		前田多門
	男爵	阪谷芳郎

組織　會員組織

目的及事業

我國に在留する外國人に日本語を修得せしめ、併せて日本文化に關する知識を授け、又在留外國人にして日本文化研究を希望する者、或は研究調査の爲め渡來せる外國人の爲に各種の研究上の便宜を與へ、又は直接之を指導援助し、以て我國文化を理解せしむるを目的とし、同時に日本語の海外普及を圖り、日本文化研究の機運を促進する事業を行ふ

沿革及既往事業

本學校は大正二年（一九一三年）歸一協會、亞細亞協會、大日本平和協會、米人協會、英人協會及共同ミッション同盟の代表者よりなる理事會に依り組織せられ、同年十月文部省の認可を得て東京外國語學校に開校した。其後三崎會館、日本基督教青年會同盟會館、東京基督教青年會館等に移つたが、昭和八年フレンド・ミッションより屋舍の寄贈を受け、內外有志の援助に依り建設資金を得て昭和十一年九月現在の地に校舍を建築した。本校は最初在留外國人に對する日本語教授を以てその主要目的としたが、其後日本文化に關する課程をも併せ教授することとなり、昭和七年六月松宮彌平氏の經營せる松宮日本語學校と合同し、その組織を擴張し、國語部を擴充し、文化部を獨立せしめ、同時に日系外國人の教育及海外に於ける日本語の普及等の事業をも開始し又出版部を設置して今日に到つた

十三年度主要事業

（一）日本語教授　（二）日本語教師の養成　（三）日系外國人に對する教育事業　（四）生徒の文化研究指導　（五）文化講座（習字、盤景、鎌倉彫、作法　（六）學友會の活動　（七）各種出版　（八）暹羅國に對する文化事業

◇十三年四月末日に於ける生徒數次の通り

▲男四〇　▲女七三　（計）一一三

社團法人　東　洋　協　會

〔事務所〕東京市麴町區内幸町二丁目一番地
電話銀座（57）四〇三九

役員

會長　法博　水野錬太郎
副會長　永田秀次郎
理事（專務）赤池濃
監事　大橋新太郎
（外に理事七名）
藤山雷太

組織

社團法人

目的及事業

東亞に於ける平和文明の事業を裨補し、また各般の事項を調査攻究して文化の宣揚に努むると共に善隣との共存共榮を圖るを以て目的とす。この目的のために實行せる事業概要次の如し

（一）東亞各地に關する學術上、經濟上、並に時事問題の調査研究　（二）海外各地に於ける公私の業務に從事すべき人材の養成　（三）海外に關する知識の普及

沿革及既往事業

明治卅一年七月、故公爵桂太郎氏により内地と臺灣との福利を增進するの目的から『臺灣協會』

として創設せられ、同四十年二月現名稱に改稱、大正三年社團法人組織となり、爾來小松原英太郎氏、伯爵後藤新平氏が相ついで會長たり、昭和四年水野錬太郎氏その後を繼ぎ現在に及ぶ

爲し來つた事業の概要は次の通り

（一）東亞各地に關する學術上、經濟上、並に時事問題の調査研究

（イ）東亞に於ける時事問題につき特に調査研究し、對策を樹て、以て朝野の參考に供し、或は進みて政府にその實行を建議す　（ロ）『東洋』（月刊）を發行し、東亞諸問題につき權威ある論評を試み、會員の好伴侶たらしむ　（ハ）『調査資料』（月刊）を發行し、主として東亞に於ける時事、經濟問題の調査結果を資料として會員に頒布す　（ニ）『東洋學報』（年四回）を發行し、東亞に於ける文化各方面の學術的研究を斯界の碩學に委囑し其の結果を公にす

（二）海外各地に於ける公私の業務に從事すべき人材養成のため左記學校を設立す

（イ）拓殖大學（明治卅三年）（ロ）大連商業學校（明治四十二年）（ハ）大連女子商業學校（大正十二年）（ニ）旅順語學校（ホ）奉天商業學校（昭和八年）（ヘ）臺灣商工學校（大正六年）（ト）京城高等商業學校（明治四十年）

（三）海外に關する知識の普及

（イ）東洋現勢講演會（毎月）（ロ）學術講習會（隨時）（ハ）海外事情講習會（毎年夏季五日乃至一週間）（ニ）巡回講演（各國各地へ映畫携帶にて）（ホ）海外視察團派遣（隨時）（ヘ）圖書室の設備（會員閲覽用）

十三年度主要事業

特に摘記すべきものなし

日本ラテンアメリカ協會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内三丁目二番地（三菱二一號館内）
電話丸ノ内（23）二八九一

役員

會長　公爵　一條實孝

理事（專務）青柳郁太郎（會計）龍江義信　渥美育郎
平生釟三郎　今井五介　千葉三郎
加藤平次郎　金澤一郎　大谷登
野田良治　上塚司

評議員
福原八郎　井上雅二　神谷忠雄
村田省藏　永島義治　野澤源次郎
法博　岡實　坂本正治　白石元治郎
田中都吉　竹澤太一　内田定槌
安東義喬　甘利造次　漢那憲和
宮坂國人
田口道造

主事

組織

會員組織　會員　約　二〇〇名

目的及事業

羅甸亞米利加諸國に關する事物を研究し、彼我交通貿易の發達を圖り、且つ相互國民の交誼を親密ならしむるを以て目的とす。この目的のために、隨時次の事項を行ふ

（一）諸般の調査研究
（二）報告書刊行
（三）講話會、協議會
（四）宴會、園遊會

沿革及既往事業

この種對外團體として最古のものに屬し、明治四十二年五月の創立、以來恒例的行事としては

（一）毎月一回づゝの例會を開催すること
（二）會員、若くは協會縁故者の彼地より歸朝せるものあるときは、その歡迎講演會を開催すること

等を行ひ來り、なほ隨時事業としての諸般調査研究は、常に有力貴重な資料となつて居る

十三年度主要事業

（一）この年春、中・南米各國領事、同大公使館員、並に本邦中・南米關係諸名士等約五十名を日本工業倶樂部に招待し午餐會を催す
（二）同秋、芝高輪なる淺野總一郎氏邸内「紫雲閣」に中・南米各國大公使等外交官を主賓とし中・南米方面關係本邦名士を陪賓として招待し（來賓總數約二百名）お茶の會を催し、交歡、親善に盡す
（三）十二月五日總會開催

イスラム文化協會

〔事務所〕東京市麴町區麴町一丁目八番地（大日本回教協會調査部内）

役員

理事長　遠藤柳作

理事（常務）法博　笠間杲雄　（同）海軍少將・匝瑳胤次

文博　内藤智秀

法博　江藤夏雄

監事　渡邊銕藏

主事　中村庸

男爵　山下知彦

組織

會員組織　會員　八七二名

目的及事業

回教諸國民との間に文化交換を爲し、相互の研究と理解認識を深め、世界文化の進展、人類の福祉に貢獻することを以て目的とす。この目的遂行のために次の事業を行ふ（一）我が文化、經濟、社會事情等の對回教諸國紹介（二）回教諸國の文化、經濟、政治、社會等諸事情の調査、研究、紹介（三）定期刊行物（年約四回、邦文雜誌）及び不定期刊行物（年約三回、支那語、トルコ語、アラビア語、イラン語、マレー語及びウルドウ語等）の發行、文獻の蒐集、研究會、講習會、講演會、展覽會等の隨時開催（四）回教諸國よりの來客接待、教授、學生の交換、留

學生の世話、各種回教文化刊行物及び情報の交換、並に飜譯、その他回教文化團體又は個人との聯絡（五）會館、圖書館、又は研究室の設置（六）その他本會に於て必要と認めたる事業

沿革及既往事業

回教諸國民の實情を探つて回教文化の眞髓を研究し、また我國の文化と國情とを是等の國民に正しく知らしむることの必要を痛感した人々が集り、昭和十二年二月に設立したのが本會である。引續き同五月より事務を開始豫定の事業に着手した。同年中の主要事業は次の通り

（一）機關誌『イスラム』第一輯、第二輯を發行（二）研究會（毎週開催）（三）講演會（毎月開催）（四）滿洲國回教徒東京視察團歡迎會（七月）其他招待會開催（五）八月より北京に海外駐在員として佐久間貞次郎氏を派遣（六）コーランの飜譯に着手（本協會研究部に於てアラビア語原典より日本譯を爲すもの）

十三年度主要事業

（一）▲機關誌「イスラム」第三輯、第四輯、第五輯、第六輯發行▲我が文化、國情の對回教徒紹介機關誌「日本」のアラビヤ語版、マレイ語版、ペルシヤ語版、ウルドウ語版の發刊並に配布▲回教諸國の政治、經濟、文化諸事情紹介のため「イスラム文化叢書」を刊行、既刊五種▲在支回教徒接觸心得としてパンフレット「支那回教徒に就いて」を編纂、陸海軍其他に寄贈

（二）▲蒙疆回教徒日本視察團一行歡迎會開催▲東京回教禮拜堂開堂式參列世界回教徒代表一行歡迎會開催、同一行記念アルバム（アラビヤ語）作成

（三）本會に委囑せられたる事業

▲鐵道省觀光局發行のアラビヤ語版「觀光リーフレット」▲內閣情報部發行の東京回教禮拜堂開堂式記念畫報（アラビヤ語）▲國際文化振興會發行のトルコ語版「日本教育の現狀」

（四）アラビヤ語竝にトルコ語の講習會開催

財團法人　同　仁　會

〔事務所〕東京市神田區神保町二丁目一〇番地
電話九段（33）二〇三〇

役　員

會　長　男爵　林　權　助
副會長　兒　玉　謙　次　醫博　宮　川　米　次
理　事（專務）醫博　田　邊　文　四　郎　（外に理事一二名）
監　事　大　橋　新　太　郎　青　木　菊　雄

組　織

財團法人

目的及事業

支那其他亞細亞諸國に醫學、藥學及び其の技術を普及せしめ、一般衞生狀態の改善を計るを以て目的とす。この目的を達する爲めに次の事業を行ふ

（一）支那、及び亞細亞諸國に對し、醫學校、藥學校、及び醫院を設立し、又はその改善を計ること　（二）前記諸國の政府、及び彼我人民の招聘に應じて、醫師、藥劑師等、及び之を幇助する技術者を紹介すること　（三）前記諸國に於ける醫學校、藥學校、醫院又は醫藥學會等と本邦に於ける此種の機關との連絡提携に付き便宜を計ること　（四）前記諸國に開業を爲す本邦の醫師及び藥劑師等に對し相當の便宜を計ること　（五）前記諸國の醫學生、藥學生の留學を奬勵し且つ其留學生に修學の便宜を計ること　（六）前記諸國の醫事衞生及び藥品に關する件を調査し

又は前記諸國に適切なる醫學藥學に關する圖書及び雜誌を刊行し、其他前條の目的を達する爲め必要なる施設を爲すこと

沿革及既往事業

支那その他隣邊友邦に對して、醫藥の學と其の技術とを普及し、依て以て彼我の交誼を敦うし、文化に貢獻せんとする目的から、明治卅五年六月に創立されたのが本會である。卅七年初代會長長岡護美子の後を襲ふて就任した大隈重信伯は、清、韓兩政府を說いて醫學校を設立せしめ、之に邦人醫師を招聘せしむることに努力し、その他醫師、助產婦、看護婦等、多數を彼地に紹介する一方、日本內地にも多くの支部を設置し、それ〴〵地方長官を支部長として資金調達の途を講じた。その間、明治四十年には畏くも御內帑金五千圓の御下賜を忝くし、大正に入つて以後は、北京の日華同仁醫院をはじめ、彼地に於て大病院の建設、經營を次々に行ひ同仁の實を擧げ來つた。昭和六年、滿洲事變のために支那の反日風潮高まり、本會も亦少からぬ影響を受けたが、その中を使命に遇進した。事業の主要なるもの次の通り

（一）診療事業　同仁會東京醫院（昭和七年開設）同仁會北京醫院（大正三年開院）同仁會漢口醫院（大正十二年開院）同仁會青島醫院（大正四年創立）同仁會濟南醫院（大正四年創立）北京交民衞生試驗所（大正九年創立）以上各醫院診療患者合計（大正十四年以降の一ケ年平均）三十萬八千五百餘人　（二）其他の事業　（イ）中國文醫藥學書籍の刊行　（ロ）雜誌『同仁』の發行　（ハ）中國文雜誌『同仁醫學』の發行　（ニ）支那衞生叢書の刊行　（ホ）東京醫事研究會を組織　（ヘ）中日醫界の連絡提携　（ト）中日醫藥學生談話會の開催　（チ）中國內に於て醫學大會の開催　（リ）日本の醫藥學生を支那へ見學に派遣　（ヌ）中國醫師並に醫學生の爲めに臨床研究實驗の便宜供與（同仁會各醫院に於て）　（ル）中國各醫學校へ日本醫學雜誌の寄贈

十三年度主要事業

（一）支那事變に對處するため、救護班・防疫班約五〇〇名を現地に派遣す

財團法人　比律賓協會

〔事務所〕東京市麻布區我善坊町三二番地
電話赤坂（48）四五〇七

役員

會長　侯爵　德川頼貞
理事長　子爵　岡部長景
理事（常務）　森　電三　　原口初太郎
理事　石田禮助　　吉澤清次郎
　　青木鎌太郎　　大島正德　　田中完三
　　柏木秀茂　　加藤恭平　　男爵　山川建
監事　森　平兵衛
主事　鶴見左吉雄　　小林次郎
　　北　正一郎

組織

財團法人　會員　一〇〇名

目的及事業

日比の親交、及び文化の發達を圖るを以て目的とす
この目的達成のため、比律賓に於ける同種の團體と連絡を保ち、次の事業を行ふ

（一）文化の紹介　（二）視察、觀光、留學に對する斡旋　（三）經濟資料の蒐集、並に交換
（四）その他理事會に於て必要と認めたる事項

沿革及既往事業

昭和十年八月に創立す。設立趣意書にいはく

『比律賓は臺灣の南方、西太平洋上に位置し、古來我が國との關係最も深く、其の流俗風習我に相似たるもの頗る多し。往時安土、桃山の時代より德川初期に於ては、我が國との交通頗る頻繁にして（略）其の後彼我の交通一時杜絶したりと雖も、明治維新に當り開國の大計樹立せられてより兩國人の相往來する者舊に倍し、殊に近年我が國民の、或は漁獲稼穡に、或は通商貿易に渡航する者年々に其の數を增すと共に、彼の國人にして學術、產業等の方面より我が國に來遊する者歲々に加はわり。而して近時比律賓の情勢は頓に隆昌に赴き、其の獨立の日將に近きに在り、我が國との交渉亦益々緊密を加へむとするは欣幸に堪へざる所なり。吾人は玆に比律賓協會を設立し、力を國交の親善、文化の向上、經濟連鎖の强化に效し、以て相互の國利民福の增進に資し惹ては東洋平和の確保と人類福祉の招來とに寄與せむことを期す』と

爾來事業中の主要なるものを摘記すれば次の通り

（一）視察、見學等のため來朝の比島知名人士、學生團等に對する接待斡旋（十一年四月、比島・議員、記者團來朝の際のごとき）　（二）在留比島學生、及び來朝比島學生の斡旋指導　（三）ダバオ問題等日比關係事項に對する斡旋　（四）比島に關する資料の蒐集、調査、及び關係刊行物の發行　（五）本邦事情の紹介

十三年度主要事業

(一) 主なる比島人に對する接待翰旋

▲一月十四日、國民議會議員米比共同專門委員會委員マヌエル・ロハス氏夫妻に對し德川會長の名を以て花籠を贈呈し旅情を慰む ▲三月八日、比島大審院陪審判事ホセ・ラウレル氏は東京帝國大學より法學博士號を授與せられたるにつき祝電を發す ▲四月五日、比島コンモンウエルス政府農商務部長官ユーロヒオ・ロドリゲス氏及水產科長ヒラリオ・ロハス氏一行來朝中の視察見學等に關し關係官廳其他各部と連絡し、種々翰旋す ▲四月七日、華族會館にてロドリゲス農商務長官一行歡迎の爲茶會を催す ▲四月廿五日、次の三氏不日歸比するにつき、華族會館に於て歡迎茶會を催す

陸軍士官學校砲兵科卒業近衞野砲聯隊附　ホセ・S・ラウレル氏
東京慈專會醫科大學卒業醫學得業士　ビセンテ・M・サバット氏
桐生高等工業學校卒業　エドウイン・ゲヴアラ氏

▲五月五日、山之內秀雄師引率第四回比島學生訪日視察團十六名在京中種々翰旋の上概ね其の見學の目的を達せしめた ▲五月七日、幸樂に於て第四回比島學生訪日視察團一行歡迎スキヤキ會を催す ▲六月廿九日、ケソン比島大統領は國民議會議員フエリツプ・ベンカミノ、大統領府武官マヌエル・ニエト少佐、同ハワード・J・ハツター軍醫少佐、保健公安委員會委員長ホセ・フアベリア博士、タヤバス州市長トーマス・モラト氏等隨行員九名と共に國際汽船金剛丸にて、本日午前八時半神戸に入港したるにつき、森常務理事出迎への上三十日迄京阪方面に於て地方官民と共に種々接待翰旋をなした ▲七月七日、ケソン大統領一行入京したるにつき、岡部理事長、森常務理事等はプラットホームに、又德川會長は「帝國ホテル」に於て之を出迎ふ。午後六時より華族會館に於て歡迎晩餐會を催す ▲七月八日、午後七時より星ヶ岡茶寮に於て德川會長個人の名をもつてケソン大統領を晩餐會に招待す ▲七月廿二日、ケソン大統領の對米對內ラヂオ放

送に關し、德川會長より謝電を發送す ▲八月十九日、ケソン大統領第六十一回誕辰に當るを以て德川會長より祝電を發す ▲十月二十日、本協會關西支部を大阪市東區內本町橋詰町三十一番地に設置す ▲十月廿七日、比島副大統領セルヒオ・オスメニア氏一行を神戸菊水に於ける協會關西支部主催スキヤキ會に招待し、又大阪市內見學等種々翰旋す ▲十月廿八日、右オスメニア副大統領一行を華族會館に於て午餐會に招待す ▲十一月十一日、華族會館に於て比島國民會議員・元ナショナル大學總長オシアス氏一行歡迎の爲茶會を催す。當日主賓の他、外務、文部、陸海軍、其の他比島關係者及第二回日比學生會議出席日本學生代表並に在留比島學生（十名）等約七十名出席す ▲十一月十五日、比律賓コムモンウエルス政府始政第三周年に相當する爲、德川會長の名を以てケソン大統領に對し祝電を發す

◇尙右の外來朝比島學生の本邦學校入學希望等に關し種々翰旋便宜を供與する所あつた。

(二) 講演其他主なる集會

二月十五日、丸ノ內中央亭に於て午餐會を催し、協會役員、會員及朝野の比島關係者相集り比島關係につき種々懇談の上協會將來の事業實施計畫に資する所あり、其他集會六回

(三) 刊行物

毎月一回（十五日）比律賓情報を發行し、役員、會員其の他關係各方面に配付する外、「マニラ港灣設備並に關稅規定」の發行、「比島關係法規集上卷」の編纂、「フイリツピン・ジヤパン・クオークリー」の買上げ、輸出組合中央會の寄贈に係る英西兩文パンフレットの配付、モデスト・フアロラン氏著「日比實業年鑑」の買上げ、ホアン・カルボ師著「日西大辭典」の出版に對する補助

(四) フイリツピン・エキスポジション參加に關する準備

神戸日伯協會

〔事務所〕神戸市神戸區海岸通一丁目
電話三宮(3)二六四六

役員

會長	關屋延之助	堀口九萬一
副會長	勝田銀次郎	渡部重吉
常務理事	榎並充造	伊藤謹二
主事	原梅三郎	

組織

會員組織　會員　五〇五名

目的及事業

日伯兩國の國民的親善、彼我國情の紹介、日伯文化の交換、兩國貿易の促進助長、對伯移植民の健全なる發達と、その奬勵を爲すを以て目的とす

以上の目的を具現する諸事業を行ふ

沿革及既往事業

大正十五年五月八日、當時の縣知事並に神戸財界人等相集り日伯關係を一層緊密ならしむる目的を以て設立す。昭和十一年末會名變更

事業中の主要なるものを擧ぐれば次の通り

(一) 大正十五年　移民收容所設立に關する建議を行ふ
(二) 昭和二年十二月　本邦兒童作品一萬二千點を伯國に送り彼地に展覽會を開く
(三) 昭和三年二月　伯國大統領宛日本畫帖を贈る
(四) 昭和八年五月　海外渡航助成會設立を計る
(五) 同年六月　移住二十五周年に當り原主事を派し伯國要人に表敬
(六) 昭和九年八月　伯國の移民制限に當り經濟使節派遣を建議し、この結果平生理事團長として渡伯
(七) 昭和十年七月　第二回全日本移植民協議會を兵庫縣と共に主催
(八) 昭和十二年二月　伯國文化風俗展主催
(九) 昭和十二年十二月　時局對伯宣明事業遂行

十三年度主要事業

(一) 昭和十三年二月　時局對伯宣明事業繼續實行
(二) 同年同月　時局に臨み對伯貿易に關する重大建議をなす
(三) 右の外、機關誌の發行、各展覽會の應援、貿易相談、移住相談、來朝伯國人の應接、親善に關する諸種の事業

財團法人　南洋協會（本部）

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地
電話丸ノ内（23）〇六〇六　二九〇〇　三九二〇

役員

會長　公爵　近衞文麿
副會長　伯爵　兒玉秀雄
理事長　林　久治郎
常務理事　飯泉良三
理事　一九名　佐々木　勝三郎
監事　大久保利賢　三宅川　百太郎

組織

財團法人　本支部所在地並に所屬會員數次の通り
△東京支部四三三　△臺灣支部八四　△新嘉坡支部七九　△爪哇支部一〇二　△關西支部一六四
△南洋群島支部一四八　△マニラ支部六九　△東海支部三五　△ダバオ支部六九　△スマトラ支部三〇　△盤谷支部五六　合計　一二六九（昭和十四、一）

目的及事業

▲目　的
本邦と南方各地との間に於ける經濟的文化的提携を圖り彼我の福祉を增進すること
▲事　業
（一）産業、貿易其の他各般の調査研究及紹介斡旋　（二）産業館其の他の設置經營
（三）文化の調査研究及紹介宣傳　（四）圖書館其の他の設置經營

沿革及既往事業

地理的、歴史的、經濟的に極めて密接な關係に在る南洋に對し、我が國民の知識觀念はまことに稚弱であり從來とも南洋に關する文化的、學術的、社交的の聯絡を缺き單に個人企業者の施設に一任し居るを遺憾とし、大正四年一月有志によつて創立されたのが本會である。昭和十四年一月財團法人に改組

十三年度主要事業

〔十三年十二月迄の分〕
（一）飯泉常務理事「東洋諸國の現勢」と題し J・O・A・Kより三十分間に亘り放送した（二月）
（二）佛領ニューカレドニア、コネ日本人會長筒井武平氏を招待約一時間に亘り同方面の事情に關する講演會を催す
（三）本部臨時總會を開催す
（四）ケソン比律賓大統領保養のため我國に來朝せるを以て花籠を贈呈歡迎の意を表した（七月）

(五) 飯泉常務理事蘭領印度、印度支那、英領馬來、暹羅の經濟的事情視察のため渡南（八月）
(六) 英文會報（Bulletin of the South Sea Association）第一號發刊す（九月）
(七) 資料第一號として「比律賓に於ける日貨排斥」と題せる「パンフレット」を發行（雜誌「南洋」の附錄として發行す）（九月）
(八) 蘭領印度輸入組合長ウェーアーエフ・ストックハイゼン博士歡迎會を開催す（十月）
(九) 英米佛蘭暹羅國の大公使を帝國ホテルに招待（十月）
(一〇) 林理事長臺灣に出張
(一一) 廣島縣產業奬勵館に於て開催の「新市場開拓展覽會」に南洋に對する圖表、寫眞、物產、標本其の他百十點出陳（十月）
(一二) オスメニア比島副大統領渡米の途次來朝せるを以て花籠を贈呈歡迎の意を表した（十月）
(一三) 爪哇支部總會
(一四) 慶應義塾大學豫科祭滿支展覽會に本會所藏の南洋に關する圖表、寫眞、物產、標本其の他參考品百五點出陳（十一月）
(一五) フーヴエールト蘭印ビリトン株式會社專務取締役エフ、イエーフーヴエルト氏歡迎（十一月）
(一六) 南洋情報第一號發刊（十一月）
(一七) 從來發行の雜誌「資料」「南洋情報」を合して「南洋情報及資料」第一號を發刊（十二月）

日亞協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目（大阪商船支店內）
電話銀座（57）三一三一

役員

會長　公爵　一條實孝
名譽會長　駐日アルゼンチン國代理公使　アドルフオ・モレノ
理事　男爵　稻田昌植　井上雅二　井出三郎
飲泉良三　今村忠助　星野錫
渡邊直達　渡邊水太郎　南條金雄
村田省藏　上杉貴子　松平俊子
男爵　福原俊丸　ベンジヤミン・コツフ　男爵　鄕誠之助
安東義衞　渥美育郎　A・A・モンテネグロ

組織

會員組織　會員一一〇名　アルゼンチンと關係ある者、或はかつて關係ありし者を以て會員とす（外務省、拓務省、其他關係方面の官公吏、會社員、實業家等）

目的及事業

日本及びアルゼンチン兩國民の親善を圖ることを以て目的とす。この目的のために次の事項を行ふ
(一) 年一回の總會
(二) 必要に應じ臨時總會

沿革及既往事業

昭和六年、時の大阪商船會社横濱支店長渥美育郎氏が、アルゼンチン國名譽領事の任にあつて、日亞兩國民の親善が一層必要なるを痛感し、有力者を說き設立するに至つたものである

十三年度主要事業

（この年度行事なし）

日印協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目二番地
電話銀座（57）一〇七七

役員

會頭　侯爵　大隈信常
副會頭　兒玉謙次　間島與喜　三宅川百太郎
理事　井上治兵衛　南郷三郎　大谷登
村田省藏　副島八十六　文博　高楠順次郎
庄司乙吉　安川雄之助　頭本元貞
山崎秀太郎

組織

會員組織
會員　一、〇〇〇名　（支部）大阪、印度甲谷陀、蘭貢

目的及事業

日本と印度諸國（英領印度、海峽殖民地、蘭領東印度、暹羅、佛領印度支那、米領比律賓等）間の親善を增進するを以て目的とす。この目的を達する爲めに行ふ事業次の通り

（一）日本對印度諸國の商工業、學藝、及び宗教上の事項を講究すること

（二）日印相互間の交通各般の調査、及び修學等に對し便益を供すること
（三）每年二回以上會報を發行すること
（四）圖書を出版し、及び講演會を開催すること

沿革及既往事業

明治卅五年九月、かつて印度に遊歷し、或は印度に對して特別の趣味關係を有する廿餘名の人たちが主唱して、本邦在留の印度人と謀り、日印倶樂部と稱する會を組織して日印の親善を講じたこれが本協會の濫觴である。（現名に改稱は翌卅六年十二月）以來本協會が爲し來つた事績の概要は次の通り

（一）商工業の調査　本邦及び印度、南洋諸國に於ける商工業者の依頼に應じ、相互の取引關係を調査し、通商上の連絡を謀り、彼我事情の疎通と紹介とにつとめ、傍ら旅行視察者に對して特別の利便を供す
（二）商品館の經營　昭和二年より印度甲谷陀に日本商品館を經營
（三）印度學生に對する盡力
（四）來遊貴顯名士の歡迎　明治卅九年、印度回教主長アガカン殿下以後多數
（五）會報の發行　英文のは印度南洋方面に對して我が國情を紹介する唯一の通信機關たり

十三年度主要事業

（一）日印商工錄（英文）の發行
（二）其他恒例の事業

日土協會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内二丁目一〇番地
電話丸ノ内（23）〇六〇六　二九〇〇

總裁　高松宮宣仁親王殿下

役員

名譽會長　本邦駐劄土耳其大使　ヒュスレヴ・ゲレデ
會長　德川家正
理事（常務）井上雅二　（同）鶴見左吉雄　大谷登　大久保利賢
井上治兵衛　村田省藏　陸軍大將松井石根　坂本一
顧問　船田一雄　安宅彌吉
幹事　内田定槌　林久治郎
小出武夫

組織

會員組織

目的及事業

日本と土耳其との兩國々民の親善を圖り、相互の福利を增進することを以て目的とす
この目的遂行のため次の事業を行ふ

（一）交驩の集り、講演會等　（二）文化使節の交換　（三）圖書雜誌の刊行　（四）土耳其國竝に近東地方に關する調査研究

沿革及既往事業

大正十五年六月の創立、爲し來つた事業中近年の著しきものを擧ぐれば次の通り
（一）エルトグルール號記念碑改修新築の企てが土耳其國政府にあるや、本協會は直にこれに對しあらゆる斡旋を爲し、定礎式に參列を始めとして、除幕式完了まで援助運動をつゞく（二）特別情報の配送　土耳其國竝に近東諸邦に關する諸般の事情にして急報の必要あるものは『特別情報』として會員宛發送すること五回
（三）日土協會々報の發行　土耳其國竝に近東地方の產業、貿易、其他に關する調査資料等を掲載して、會員及び關係各方面に配贈すること既に二十號
（四）『日土・土日大辭典』の出版、三年の日子を積み本邦最初の此の大辭典が完成したのは昭和十一年十一月であつた。收むるところ三萬字（文學博士内藤智秀氏編纂）
（五）我が國情を彼國に傳へ、彼國の實情を我國に傳ふべく文化使節として本協會々員駒澤大學教授大久保幸次氏を昭和十一年春土耳其國に派遣す
（六）萬國婦人子供博覽會へ參加出品方に付き各方面へ斡旋（昭和八年三月）
（七）土耳其語讀本の上梓（同九年十二月）
（八）世界婚禮風俗展に斡旋（同十年一月、三越）
（九）近東事情展に斡旋（同年七月愛知縣商品陳列所）

十三年度主要事業

例年通りの事業を行ふ

海外協會中央會

（事務所）東京市麴町區有樂町一丁目七番地（靈絲會館内）
電話丸ノ内（23）二八九〇

役員

會長　今井五介
副會長　津崎尚武
顧問　公爵近衞文麿
理事（本部選出）　白谷佑吉　大麻唯男　渥美育郎　岡田忠彦　農博小平權一　横尾惣三郎　井上雅二（外一九名）
理事（各協會選出）（略）　小坂順造　成毛基雄　本間利雄　風見章　守屋榮夫　鄰山智　一宮房次郎　法博山岡萬之助　武富敏彦　大野緑一郎　永田稠
相談役（各協會選出）（略）
幹事（庶務主任）　眞中義弘

組織

會員組織　次の二種の會員よつて組織される

（團體）　各府縣海外協會
（個人）　海外發展に關し學識經驗ある者

目的及事業

海外の發展を目的とする府縣各團體の聯絡統一を計り、且つ其の普及發達を期するを以て目的とす。この目的を達成するため次の事業を爲す
（一）内外移住地の事情の調査、研究、及び宣傳　（二）國民海外思想涵養に關する諸事業
（三）海外發展の指導教育及び必要なる人材養成補助　（四）府縣海外協會、及び海外移住組合助成　（五）關係諸團體との聯絡、又は統一　（六）在外同胞の後援に關する事業　（七）機關雜誌の發行　（八）其他必要と認むる事業

沿革及既往事業

創立は大正十二年、以來爲し來つた事業は次の通り
（一）印刷物の刊行（海外移住パンフレット、移住地調査報告書、海外協會要覽等）　（二）海外移住奬勵宣傳（講演會、映畫會、展覽會等）　（三）滿洲移住者の調査　（四）人材養成（日本力行會海外學校に委託、養成せるもの約二百人）　（五）在外同胞文化事業（圖書雜誌の寄贈等）　（六）ブラジル國内アリアンサ移住地の建設　（七）移住組合法制定運動　（八）海外移住者の歡送　（九）樺太移住の斡旋（昭和三年より同七年まで）

十三年度主要事業

在外團體との聯絡（海外に於ける日本人會、其他の團體と聯絡し、情報の交換、在外同胞の爲めの諸般の斡旋等を行ふ）

國際文化振興會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内二丁目一六番地（明治生命館内）
電話丸ノ内（23）〇九五七　二〇三八　二〇八九

總裁　高松宮宣仁親王殿下

役員

會長	公爵 近衛文麿	男爵 鄉誠之助
副會長	侯爵 德川頼貞	伯爵 黑田清
理事長	伯爵 樺山愛輔	三原繁吉
常務理事	子爵 岡部長景	
	男爵 團伊能	

評議員　一五六名（外に理事一三名）

組織　財團法人（必要に應じ支部を設置することを得）

目的及事業

國際間文化の交換、殊に日本及び東方文化の海外宣揚を圖り、世界文化の進展、及び人類福祉の增進に貢獻するを以て目的とす。この目的を達成する爲め次の事業を行ふ

（一）著述、編纂、翻譯、及び出版　（二）講座の設置並に講師の派遣及交換　（三）講演會、展覽會及演奏會の開催　（四）文化資料の寄贈及交換　（五）知名外國人の招請　（六）外國人の東方文化研究に對する便宜供與　（七）學生の派遣及交換　（八）關係諸團體又は個人との聯絡　（九）映畫の作製及其の指導援助　（一〇）會館、圖書室又は研究室等の設置經營　（一一）其の他理事會に於て適當と認むる事業

沿革及既往事業

昭和九年春創立さる。以來爲し來つた事業中の主要項目は次の通り

（一）著述、編纂、翻譯、及び出版　（イ）歷史、言語、文學、學術、宗教、道德、教育、法律政治、經濟、美術、工藝、建築、音樂、演劇、風俗、習慣、武術、遊技等、文化活動の各部門に亘り、邦語又は外國語の著述を創作、編纂、刊行すること　最近の例としては、昭和十二年暮に出版した『英文日本地圖』同十三年より三年計畫を以て編纂に着手の『英文日本百科事典』のごとき、また原田治郎氏の著（英文）『グリムプス・オブ・ジャパニース・アイディアルス』等がある　（ロ）右の外、日本文化に關する著作、我が國人の研究に成れる東方文化に關する著作の全文、又は大意を外國語に翻譯、刊行すること、並に我國に於ける學術的論文を外國語に翻譯すること　（ハ）我國、又は外國の文化に關する外國語の良書を邦譯して刊行すること　（二）內外譯語の統一調整を圖るに努むること

（二）講座の設置、講師の派遣、及び交換　（イ）外國に於ける主要大學に日本文化に關する講座の設置を圖ること　（ロ）外國の學校に日本語講座の設置を圖り、若くは日本語學校の設置を圖ること以上の二項に就ては、例へば他の機關から外國へ講師派遣等の場合、これに對して本會が援助を與へるといふやうな方法に出たことも多く、また既に獨逸ハムブルグ大學の日本研究室

へ資料の寄贈、米國コロムビア大學日本學研究室、ハワイ大學東洋講座への資料寄贈、伊太利の中亞極東協會への同樣寄贈等が數へあげられる　(ハ)　我國と外國との間に講師の派遣及び交換を爲すこと

(三)　講演會、展覽會及び演奏會の開催　(イ)　我國と外國との間に名士の派遣、招請をなし講演會其の他を催すこと　(ロ)　外國に於て日本文化に關する展覽會を開催し、本邦に於ても亦外國文化紹介の展覽會を開催すること　(ハ)　我國及び外國の演劇、舞踊、音樂を相互に紹介する爲め內外に演奏會等を開催すること　以上三項に就ては、例へば每年春秋二回づつ、東京、京都地方に在住の外人の爲めに、日本文化講座を開催するがごとき、また、昭和十三年五月伯林に開催の第一回國際手工業博覽會への參加のごとき、その他、海外に開かれる日本關係の各博覽會、展覽會へ常に資料の提供、出陳を爲し來つてゐる

(四)　文化資料の寄贈及び交換　(イ)　我國並に東方の文化に關する出版物を外國の大學、圖書館其の他に寄贈し、若くは出版物の交換をなすこと　(ロ)　本邦美術品其の他の文化資料を外國の博物館等に寄贈し、又は貸與し、若くは此種文化資料の交換をなすこと。以上に就ては、例へば歷史的圖書等の寄贈、交換のごときがそれである

(五)　知名外國人の招請　外國の知名なる政治家、實業家、學者、新聞記者、思想家、小說家、藝術家等を本邦に招請し、若くは其の來遊に便宜を供與し、我國の眞價を認識せしむるに努むること、例へば最近に於ては昭和十二年暮れ女流劇作家ゾナ・ゲール・ブリース女史を招いたごときもこの一例である

(六)　外國人の東方文化研究に對する便宜供與　(イ)　本邦來遊の外國人に對し日本文化若くは東方文化研究上の便宜を供與すること　(ロ)　外國に於て日本文化若くは東方文化を研究する者

に便宜を供與すること　例へば寫眞『日本の文化と生活』を希望により各方面へ配つて居るがごとき。また『日本美術幻燈板』を、同樣希望に應じて配つてゐるがごときが其の例で、幻燈板は彫刻、繪畫、工藝、庭園、建築の五部門より成り、解說が添へられて居る

(七)　學生の派遣及び交換　(イ)　將來國際文化活動に從事すべき優秀なる本邦學生を外國に留學せしむること　(ロ)　優秀なる外國學生を誘致し、若くは本邦留學に關する援助をなすこと

これに就ては例へば日米學生會議への補助、また近い例では米國大學旅行協會の催しに對する補助等を擧げることができる　(ハ)　內外大學其の他と聯絡を保ち留學生の交換を圖ること

(八)　文化活動に關係ある團體若くは個人との聯絡　(イ)　外國に於ける諸種の文化事業團體と聯絡を圖ること、殊に日本文化若くは東方文化に關係ある團體若くは個人との聯絡を密接にすること　(ロ)　國內に於ける諸種の文化事業團體若くは個人との聯絡を密接にし、必要に應じて適當の援助を與ふること　以上に就ては例へば昭和十二年の世界教育會議に對する本會の援助の如きが最近の例として擧げられる

(九)　映畫の作製及び其の指導援助　(イ)　日本文化を外國に宣揚すべき映畫を作製すること　(ロ)　此種映畫を作製する團體若くは個人に對し必要なる指導援助を與ふること　(ハ)　外國に輸出する我國映畫に對する統制若くは檢閱に協力　以上に就ては、本會が作製した卅五ミリ映畫『日本の小學校教育』『日本畫家の一日』等が擧げられる

(一〇)　會館、圖書室、研究室の設置經營　(イ)　以上各項の事業の目的を達成するに適當なる會館、圖書室、研究室、其の他の施設を我國內若くは外國主要地に親ら設置經營し若くは之が設置を援助すること　(ロ)　特に本會事業の中心地たる東京に成るべく速に中央會館を設置すること　圖書館は既に本會事務所內に開設され、日本文化に關する歐文圖書を現在四、〇〇〇册藏して居り、日本文化研究の外人に公開して居る

十三年度主要事業

（一）本會代表者出張　（1）紐育日本文化會館（ジャパン・インスチチユート）の創設　（2）姉崎理事は壽府に於て開催の學藝協力國際委員會年次會合其他の會合に出席の爲め五月渡歐、十月下旬歸朝　（3）高楠理事は布哇大學の招聘により八月渡布　（4）正木理事は北京に開催の日支文教協議會に出席の爲渡支

（二）對外聯絡　（1）豫て巴里、壽府、ヴェノスアイレス、メルボルン、紐育の各地に夫々常置したる聯絡員の外、北京に山室三良氏、リオデジヤネイロに小林進氏を聯絡員に委囑した

（2）尙海外に出張せる浦口まさ子女史（アメリカ）、荒木光太郎氏（ドイツ）、笠井重治氏（歐米）に聯絡事務を委囑

（三）日本文化研究及その發表の援助　（1）ハロルド・ノーブル氏　（2）島内敏郎氏　（3）ジョセフ・ニウマン氏　（4）ジョルジユ・ボノー氏　（5）ロベルト・ドレアン氏

なほ前年度に引續き、サミユエル・ニウソム、ヴインセント・カンゾネリ、ロルフ・ビンケンシユタインの諸氏に對し夫々便宜を供與しつゝあり

（四）講師及學生の派遣及交換　本邦に於て開催の第四回日米學生會議、第二回フイリツピンに於て開催の日比學生會議に夫々補助を與へた

（五）知名內外人及團體派遣及招請　（1）「アラビヤ」「イエーメン」國王子アル・フーセン殿下御來朝に當り種々歡迎申上げた　（2）伊國フアシスト訪日親善使節團、伊國訪日經濟使節團に對し之に歡迎の意を表し且つ種々便宜を供與　（3）巴里舞踊圖書館長ロルフ・ド・マレ氏、洪牙利日洪協會副會長イストヴアン・メゼト氏の來朝、野上豐一郎氏、荒木光太郎氏、笠井重治氏の海外出張に對し夫々便宜を供與　（4）本會、日本商工會議所、中南米輸出組合聯合會の三團

體名に於て招聘せる秘露訪日經濟文化使節團一行に對し本會は專ら教育施設の視察及見學、知名文化人への紹介に便宜を取計らひ又今後に於ける日秘文化交換に關する座談會を開催し本邦文化の紹介に努めた　（5）外務省後援により秘露國前首相リヴアアグエロ氏を招聘、十一月末來朝、約一ヶ月滯日

（六）講演、展覽、演奏　（1）講演　（イ）文化講座　京都春季文化講座、東京秋季文化講座　（ロ）ロルフ・ド・マレ氏講演會　（2）展覽　（イ）獨乙ライプチツヒ日用品見本市　（ロ）伯林第一回國際手工業博覽會　（ハ）ケルン市演劇展覽會　（ニ）ジユネーヴ國際庭園展覽會　（ホ）サンチアゴ市四百年祭記念展覽會　（ヘ）ボゴタ市四百年祭國際書籍展覽會　（ト）內閣情報部主催「思想戰」展覽會

尙左記に對し目下準備中　○葡國建國八百年記念展覽會　○桑港金門萬國博覽會　○桑港金門萬博日本古美術展覽會　○紐育萬國博覽會　○巴里國際舞踊博物館主催日本舞踊展覽會

（七）資料の作成　（1）著述、飜譯、出版　（イ）著述　○日本文化叢書　○日本古代文學解題書　○日本現代文學解題書　○一九三五年雜誌論文集　○英文兒童讀物集　○册子「日本」○英文書目年報　○日本文化研究標準書目　○北歐語日本文獻小目錄　○英文百科辭彙　○英文日本語辭典　（ロ）飜譯　○德川法制資料英譯　（ハ）出版　本會に於て出版又は出版補助をなしたるもの次の如し　○本會文化講座講演錄（英文）　○原田治郎氏講演集（英文）　○田村剛氏「日本庭園藝術」　○姉崎正治氏講演錄（英文）　○シユプランガー氏講演錄　○シユミツト氏講演錄再版　○一九三八年英文日本映畫年鑑　○英文日本地圖索引　○カタログ、パンフレット類　○季報及設立趣意書　○出版補助　十三種　（2）幻燈板、寫眞、映畫、蓄音器盤の作成　（イ）幻燈板　總枚數一四、五四〇枚。又幻燈板「日本」「現代美術」を製作中

（ロ）寫眞「日本の文化と生活」は現代日本の各方面に涉りて撮影。又伯林手工業博覽會に出品

の爲各種手工業の製作過程を撮影、又桑港萬國博に出品すべき寫眞を懸賞募集す　（八）　映畫
○「日本の紙」　○「漆器」　○「扇子」　○「友禪染」　○「日本兒童舞踊」　○「日本の木版」　○「日本刀」　○「日本畫」　○「日本の建築」　○「日本の料理」　○「傘」　○「提灯」　○「人形の製作」　○「竹細工」　○「日本の小學校生活」　○「日本の花卉藝術」　○「日本畫家の一日」　○「日本の陶磁器」縮寫　○本會援助により製作せる映畫　▲　米人講演者リース氏講演用「日本」　▲　カッ氏講演用「カルチユラル・グリンプス・オブ・ジヤパン」　○米國人バーネット女史の依頼により「現代日本」　○フランス人パラッシュ技師撮影により「日本の城」　○國際映畫協會は四月を以て解散せる處外務省より右事業五萬圓の助成金を以て本會に引繼方下命ありたるにより引受に決定各種の事業及計劃及支出豫算を承認した　○八月伊太利ヴェニスに開催せられたる第六回國際映畫博覽會へ出品映畫選定に關し關係官廳及民間側より委員を擧げ協議の結果劇映畫は「佛語版、風の中の子供（松竹大船撮影所作品）」、「獨語版五人の斥候兵（日活多摩川撮影所作品）」文化映畫は「英語版、東京シンフオニー（國際觀光局作品）」、「英語版、草原パルガ（南滿洲鐵道株式會社作品）」並「伊語版、日本の小學校（本會作品）」の五種を出品し、各國共多數の映畫を出品せるが審査の結果「五人の斥候兵」は伊太利宣傳大臣賞を獲得し將來邦畫の海外進出に光明を與へた

（二）　蓄音器盤　一般外國人に了解せしむる爲解說付日本音樂紹介レコードを製作すべく田邊尙雄、カンゾネリ兩氏援助の下に鋭意研究中

（八）　資料の頒布及寄贈　一般文化資料及本會製作になる出版物、映畫、幻燈板、寫眞を世界各國の公館、學校、圖書館、文化團體、個人研究家等に頒布及寄贈した、その寄贈國は約三十ケ國、寄贈件數約六百件　寄贈出版物數三〇、一六一册　寫眞枚數　二、九二四枚　幻燈板枚數一〇、八五七枚

（九）　圖書室　（1）現在藏書數　五千五百册　（2）閱覽者總數（外人）一、五二一名

日華貿易協會（東京本部）

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内三丁目（東七號館内）
電話丸ノ内（23）二七四六

役員

會長　兒玉謙次
副會長　飯尾一二
理事（常務）兒玉謙次（同）飯尾一二（同）戴克諧
（同）高島誠一（同）油谷恭一（外二一名）

組織

會員組織　會員　二〇〇名

目的及事業

日華兩國間に於ける經濟狀況の共同研究、並に貿易の促進を計るを以て目的とす

沿革及既往事業

日華貿易協會は昭和十一年一月、日本工業倶樂部に於て創立總會を擧行、またこれと同體たるべき民國側の中日貿易協會は民國二十五年一月の同じ日に上海銀行公會に於て創立總會を擧ぐ、以來爲し來つた事項は次の通り　（一）　昭和十一年二月、東京本部第一回理事會開催、上海本部も同樣、斯くて事務所々在地もそれ〴〵定まる　（上海は、同地江西路金城銀行内）　（二）　兩本部の連絡については差當り相互に產業、經濟、貿易等に關する定期刊行物其他の資料を交換する事とす　（三）　三月上海本部理事會を開催、東京本部規定の理事會章程を決定し密輸貿易に關し協議す　（四）　五月東京本部理事會を開催し、密輸問題に關し上海本部に回答を發す

十三年度主要事業

日華貿易への善處

大亞細亞協會

〔事務所〕東京市麴町區内幸町二丁目（大阪ビル新館内）
電話銀座（57）〇八一〇

役員

會頭　陸軍大將　松井石根
副會頭　文博　矢野仁一　文博　村川堅固
評議員　一九名
常任理事　下中彌三郎　中谷武世
監事　陸軍少將　西原矩彦（外に理事四六名）
加藤敬三郎　高木陸郎

組織

會員組織

支部　大亞細亞協會大阪支部（大阪市北區船大工町一堂ビル九階清交社内）　大亞細亞協會金澤支部（金澤市南町第一徴兵ビル東洋建物株式會社内）　大亞細亞協會名古屋支部（名古屋市東區車道東町一二三番地宅間重太郎方）　大亞細亞協會京都支部（京都市烏丸通夷川上ル京都商工會議所内）　大亞細亞協會福岡支部（福岡市藥院堀端七福岡縣教育會館内）　熊本縣大亞細亞協會（熊本市熊本縣廳學務課内）　臺灣大亞細亞協會（臺北市表町二ノ一一）　朝鮮大亞細亞協會（京城府大和町二ノ一〇二庄司秀雄方）　中國大亞細亞協會（天津日本租界伏見町協昌里五十五號）　比律賓大亞

細亞協會（比律賓マニラ・ヒダラゴ八六一號望月方）

目的及事業

亞細亞諸國の文化、政治、經濟、社會等の諸事情を調査攻究すると共に、皇國と亞細亞諸國相互間の親和誘掖關係の增進、並に之等の諸國に對する皇國文化の普及流汎を圖り、やがて全亞細亞を打つて一丸とする亞細亞聯盟の實現に向つて拮据するを目的とす

この目的を達成するため次の事業を行ふ

（一）日本國民に對する亞細亞意識の鼓吹、亞細亞諸國の國情の紹介　（二）他の亞細亞諸民族に對する皇國文化及び滿洲國の國情の紹介、並に宣傳　（三）日本と亞細亞諸國、特に近東、中央亞細亞方面との通商に關する調査、連絡、紹介　（四）亞細亞諸國との間に於ける教授、及び學生の交換、研究員及び情報員の派遣、經濟調査團、新聞記者團の招待並に派遣　（五）汎亞細亞會議の開催　（六）亞細亞會館の設立　（七）本協會附屬の學校、及び研究所の設立　（八）機關新聞、雜誌、圖書、パンフレット等の發行

沿革及既往事業

『亞細亞は文化的にも、政治的にも、經濟的にも、地理的にも、一個の運命共同體であり、亞細亞諸民族の眞の平和と福祉と發展とは、一體としての亞細亞の自覺と其の有機的結合の上にのみ可能である』との根本認識の上に立つて、昭和八年三月一日（滿洲國建國一周年記念日）發會式を擧げたのが本協會である。以來爲し來つた事業の主要なるものを擧ぐれば次の通り

（一）諸會合——（イ）昭和八年中、建川全權、小磯參謀長、丁滿洲國公使、中國李擇一氏、板垣少將、アフガニスタン公使、印度チヤマン・ラル氏その他の歡迎懇談會。松井臺灣軍司令官、南

雲大佐、石川中佐の送別會。その他役員會意見交換會等　(ロ)　同九年中、松井大將、末次大將、今田少佐、山脇大佐、秦中佐、民國雷壽榮中將、根本中佐、丸山中佐、板垣少將、清水幹事、影佐中佐、坂西大佐、滿洲國張實業部大臣、柴山中佐等の上京、離京を機にそれ〴〵之等諸氏を中心とする懇談會。南支視察學生團の歡送迎會。役員の意見交換會等　(ハ)　同十年中、和知中佐、横山正修氏、土肥原少將、殷同氏、酒井大佐、柴山中佐、影佐中佐、花谷中佐、松井大將、中堂中佐、聯合艦隊所屬會員、石川中佐、根本大佐等の上京、離京を機とする歡送迎懇談會

(二)　親日外交家、黄郛、唐有任兩氏追悼會　(十二年大阪にて)　(ホ)　滿洲國留學生招待會、(同年京都にて)

(ヘ)　亞細亞民族大會(同年大阪にて)

(二)　諸研究會——(イ)　昭和八年中『亞細亞經濟ブロックに關する研究』以下一一回　(ロ)　同九年中『南支事情研究』以下一一回　(ハ)　同十年中『南支安南事情研究』以下一二回

十三年度主要事業

▲同人送別懇談會(一月七日)　▲時局委員會(一月廿六日)　▲時局聲明(二月一日)　▲會頭松井大將凱旋(一月廿五日)　▲朝鮮大亞細亞協會范氏感謝會(一月十五日)　▲松井大將以下凱旋同人歡迎懇談會(三月八日)　▲佛印、暹羅事情研究會　▲北京新民學院學生視察團歡迎會三月廿二日)　▲大阪支部の松井會頭に對する歡迎晩餐會(三月廿一日)　▲松井大將各地慰問(三月——四月)　▲松井大將各地慰靈祭參列(四月)　▲名古屋支部發會式(四月十一日)　▲中山、田代兩理事赴任(四月)　▲京都支部松井會頭歡迎茶話會(三月廿九日)　▲金澤支部同晩餐會(三月卅一日)　▲臺灣大亞細亞協會のシャム訪日學生團に對する歡迎晩餐會(四月十三日)　▲同人歡迎懇談會(四月廿八日)　▲鹿子木理事歡迎會(五月十三日)　▲各地支部講演會並に發會式(五月二十五日、

福岡支部講演會、松井大將、伊藤公使、鹿子木博士　△五月二十六日、熊本縣下亞細亞協會發會式、松井大將、伊藤公使、鹿子木博士　○五月二十八日、京都支部講演會、松井大將、伊藤公使、鹿子木博士　○五月三十日、名古屋支部講演會、松井大將、白鳥公使、鹿子木博士　○五月二十九日、大阪支部學生部發會式、松井大將、白鳥公使、鹿子木博士

第四回比島學生訪日視察團々長ホセ・ラニレス博士(比島大學教授)一行歡迎晩餐會(四月十五日)　▲支那問題研究會(六月卅日)　▲金澤支部講演會(六月廿四日)　▲大阪支部學生部講演會(六月廿五日)　▲臺灣大亞細亞協會　南支調査會指導部第一回部會(六月四日)　資源調査部同(六月十五日)　同金融經濟部同(六月卅日)　▲西亞細亞事情研究會(六月七日)　▲熊本縣大亞細亞協會發會式(五月廿六日)　▲大阪支部學生部發會式(五月廿九日)　▲福岡支部講演會(五月廿五日)　▲京都支部講演會(五月廿八日)　▲名古屋支部結成記念講演會(五月三十日)　▲臺灣大亞細亞協會第一回南支調査委員會(五月十七日)　同運輸交通部會(五月廿一日)　▲同人懇談會(七月廿七日)　▲上海經濟事情研究會(七月十八日)　▲臺灣大亞細亞協會第五回定期總會(七月十五日)　▲佐藤理事歡迎午餐會(八月十六日)　▲臺灣大亞細亞歡迎午餐會(九月廿三日)　▲臺灣大亞細亞協會主催支那事變從軍記者座談會(八月三日)　田多井四郎治氏「世界文化の根源と我が肇國精神」講演會(八月十二日)　▲白鳥大使送別懇談會(十月十九日)　▲福岡支部半田理事歡迎會(十月三日)　▲名古屋支部松井會頭を圍む座談會(十月七日)　▲京都支部講演會(十月廿六日)　▲臺灣大亞細亞協會南支調査會拓務部々會(九月十二日)　同指導部々會(九月廿二日)　▲栗原東亞局長歡迎懇談會(十一月十七日)　▲維新政府一行歡迎午餐會(十一月十九日)　▲臺灣大亞細亞協會(十月十九日)　▲會議、講演會　(十二月廿五日)京都講演會　(十二月廿六日)神戸支部發會式、講演會、大阪大亞細亞主義講演會(十二月十三日)　東京大亞細亞主義講演會

對支文化工作協議會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目（大阪ビルディング新館）
（日本文化中央聯盟內）
電話銀座（57）一一八七

役員

海外事情研究會	會長	神田正雄
北支那協會		芳澤謙吉
國際文化振興會	常務理事子爵	岡部長景
斯文會		濱野知三郎
全國產業團體聯合會	常務理事	藷桂之助
大東文化協會	幹事	長瀧武
大日本回教協會		宮村三郎
中央滿蒙協會	會長男爵	阪谷芳郎
東洋協會	專務理事	赤池濃
東亞同文會	理事長子爵	岡部長景
東京朝日新聞社東亞問題調査會常任幹事		大西齋
東京日日新聞社東亞調査會	主事	中保與作
東亞經濟調査局	常務理事	佐田弘治郎
東洋婦人教育會	理事	清藤秋子

同仁會	常務理事	田邊文四郎
同盟通信社	社會部長	岡村二一
南支調査會	副會長	齋藤恒
南洋協會	常務理事	佐々木勝三郎
日華學會	常務理事	砂田實
日華倶樂部	專任理事	吉見正任
日本外交協會		倉知鐵吉
日本經濟聯盟會	常動理事	高島誠一
日本國際協會	副會長	山川端夫
日本放送協會	常務理事	小山松吉
日本商工會議所	理事	松井春生
日本文化中央聯盟	理事長	關正雄
日滿文化協會	理事	水野梅曉
日華實業協會		兒玉謙次
佛教聯合會	主事	市橋覺俊

◇連絡委員

陸軍省軍務局長	少將	町尻量基
海軍省軍務局長	少將	井上成美
外務省文化事業部長		三谷隆信
興亞院文化部長		松村雄

組織

會員組織

本協議會に次の機關を置く

▲代表委員　若干名　▲常務委員　若干名　▲代表委員は各組織團體より一名宛選出す、代表委員は代表委員會を組織し本協議會の目的を達するに必要なる事項を評議す
▲常務委員は代表委員中より互選し其の委任を受け會務を處理す
◇本協議會の事務を處理する爲日本文化中央聯盟に其の事務所を置く

目的及事業

時局に關し緊要なる對支文化工作の實施に當り關係團體相互に協力し其の有效適切なる實行を圖ることを以て目的と爲す

沿革及既往事業

昭和十二年十月七日、外務省文化事業部長(代理)、外二十七團體代表、及び日本文化中央聯盟理事長等參集、本會創設に就き協議の結果、先づ小委員會を設定することゝなり、左記諸氏に小委員を委囑す

外務省文化事業部長　岡田兼一　國際文化振興會常務理事伯爵　黑田清
東亞同文會常務理事　津田靜枝　日華學會々長　侯爵　細川護立
日本外交協會　牛澤玉城　日本經濟聯盟會常勤理事　高島誠一
佛教聯合會主事　市橋覺俊　日本放送協會常務理事　片岡直道
イスラム文化協會理事長　遠藤柳作　同盟通信社々長　岩永裕吉
日本文化中央聯盟理事長　小山松吉　日本文化中央聯盟常務理事　松本學
日本文化中央聯盟理事子爵　岡部長景　日本文化中央聯盟理事　出淵勝次

(一)　第一回小委員會　十月十二日開催　(二)　第二回小委員會　同二十二日開催、當面の戰時對支文化工作を次の如く決定す

〔戰時對支文化工作の目標〕日支提携して共產主義を排擊し東洋文化の確立を期す　(イ)　日本の眞意を理解せしめて支那民衆に日支の文化的提携の氣運を釀成せしむること　(ロ)　文化工作を

日本の文化侵略なりとするが如き誤解を支那民衆に與へざる樣萬全の注意を拂ふこと
以上の目標により差當り實行すべき具體案として次の二項目を決定す
(イ)　我國に於ける支那關係諸文化團體は協議會を構成して對支共同文化工作に關し積極的集中的に宣傳其他各種の活動を爲すこと
(ロ)　支那關係諸文化團體協議會より中外に共同聲明を發すること
(三)　第三回小委員會　十一月二日、第四回小委員會　同五日　(四)　總會(發會)　十一月二十九日開催、本會規約を決定し、共同聲明案文を日本文化中央聯盟理事長に一任することゝす。なほ代表委員、連絡委員等を決定　(五)　第一回代表委員會(二月九日)次の件を協議す
(イ)　共同聲明決定の件　(ロ)　常務委員選任の件　(ハ)　事業計畫に關する件　(ニ)　其他必要なる事項
(註)　共同聲明の趣旨の一節を擧ぐれば次の通り
『今や兩國は千鈞一髮の危機に直面した。兩國々民は心を和げ氣を平にし將來悠久なる鄰接關係を忘れず永遠の良圖を建設せねばならぬ。是に於て我等は此の際東洋固有の文化を研究し更に向上發展を謀り個人の道德は勿論社會全般の施設に涉り其の精華を更生發揮して歐洲大戰以來頓に缺陷を現した西洋文化を匡正補救し因て以て世界人類に貢獻すべき兩國協同の大任務を實行する事を提唱せざるを得ぬ。此の如くにして始めて兩國の危虞を除き東洋の平和を確立すべく且つまた禍を轉じて福とする事も可能となつて來る。我等は多年支那に對し文化事業に微力を盡して來たものなるが未曾有の時機に際會し一致協力奮ひて東洋の難局に善處せんとして居る。是れ本會の成立した所以である』
(六)　第一回常務委員會(同十四日)　對支文化工作の諸具體案につき愈々協議を開始す

十三年度主要事業

(一)　第二回代表委員會は三月四日大阪ビル內レインボーグリルに開催本協議會代表委員神田正

雄氏の「對支文化工作を中心としたる北支蒙疆視察談」あり。後協議懇談を重ぬ（二）第二回常務委員會は三月十六日開催、日本への支那視察團來遊者等に對し外務省その他關係諸團體と連絡を計り日本文化（主として科學、工業方面）紹介の斡旋を爲すこと、その他在支新聞或はラヂオに依る文化工作に就て意見を交換した後、音樂に依る日支融和に永年盡力された上海日本高等女學校教諭成田藏巳氏の經驗談、感想を聞き同氏作詞作曲の「亞細亞讃歌」「輝く東亞」「大聖孔子を讃ふ」等のレコードを聽取した（三）第三回代表委員會は四月八日大阪ビル內レインボーグリルに於て開催の上（イ）ラヂオに依り對支文化工作を作す爲めに各團體毎に講演放送の原稿を作製することに決定（ロ）視察團、來遊者に對しての便宜供與並（八）支那新聞の文藝欄への資料提供等に關し出席者より夫々意見の開陳が行はれた（四）四月十四日各加盟團體に對しラヂオ放送講演原稿起草の依頼狀を發送す（五）對支文化工作ラヂオ海外放送は八月一日より開始、東京中央放送局海外放送により順次之を行つた。プログラム次の通り（上の數字は放送月日）

八・一　支那事變と日本の眞意　日本文化中央聯盟理事長　小山松吉
三　尊孔と平和　斯文會常議員　濱野知三郎
四　支那の流行病に就いて　同仁會副會長　宮川米次
七　日支親善に關して支那民衆に要望す　東洋協會專務理事　大藏公望
一五　歐米依存を排す　日華倶樂部專任理事　吉見正任
二四　日支經濟提携の要諦　日本商工會議所理事　木村增太郎
三〇　對支文化工作に關する基本的考察　日本國際協會副會長　山川端夫
九・四　イスラム教徒の觀光日本感　イスラム文化協會理事長　遠藤柳作
七　湖南省旅行の回想　海外事情研究會理事　神田正雄
一一　平和の基礎觀念と日支提携の要諦　國際文化振興會理事　東亞同文會理事長　岡部長景

二六　中國青年學徒各位に告ぐ　日華學會理事　砂田實
二七　日支佛教の相關性に就いて　佛教聯合會主事　市橋覺俊
一〇・六　中華民國志士仁人に敬んで告ぐ　日滿文化協會理事　水野梅曉
七　支那婦人に告ぐ　東洋婦人教育會理事　清藤秋子
一一・七　文化使節より歸りて感有り　伯爵　酒井忠正
一四　中國に對する私の希望　東京朝日新聞社　大西齋

十四年

一・一　東亞新秩序建設の年頭に際し所感を述ぶ　日華倶樂部會長　坂西利八郎
二　日本の眞意　日本文化中央聯盟常務理事　松本學
二・九　中華民國の舊友として民國各位に告ぐ　東亞同文會理事　井上雅二
一五　互に知ること　東京朝日新聞　太田宇之助
一八　文化交際の基準と其の方策　斯文會理事　諸橋轍次
二八　溫故知新　東京文理科大學教授　山口察常
三・八　支那回教徒に告ぐ　斯文會理事文學博士　笠間杲雄
一一　日支兩國民は互に國民性を理解するを要す　イスラム文化協會　八角三郎
一三　日支親善は知と信とより　大東文化協會理事　齋藤恒
一六　世界の相と東亞建設　南支調査會副會長日華倶樂部理事　下村宏
一八　中國青年層に求む　日本文化中央聯盟理事　高木富三郎
二五　中華民國の諸姉妹に告ぐ　日本外交協會幹事　服部繁子
東洋婦人教育會理事　文學博士服部宇之吉夫人

二七　中國產業人士に告ぐ　東京商工會議所副會頭　大日本製糖會社々長　藤山愛一郎

◇十一月十九日の對支文化工作協議會第四回常務委員會に於て、對支ラヂオ放送につき更に一段の成果を擧ぐべく次の通り決議された

（イ）對支文化ラヂオ放送原稿を印刷に附し配布すること　（ロ）今後引續き加盟各團體より原稿の提出を乞ふこと　（ハ）學術團體、科學會に對し科學に關する材料の提供を求むること

▲以上放送完了のものは順次に原稿を同盟通信社を通じて上海新申報及び北京新民報に送られ、これらの紙上に發表掲載せられ、或は上海發行の中華新聲半月刊雜誌等に轉載され、なほこれに對する感想文も掲載された

◇十三年中の放送原稿は之を取纒め菊版本文百二十五頁（華文並に日本文）全壹册とし『東方文化講演集』として十二月七日附出版し廣く內地並に支那各地各方面の識者に之を頒布した

（六）十一月十九日第四回常務委員會を開催、小山代表委員長以下參集して、近く來訪の東亞文化協議會支那側代表委員の歡迎招待會を開催することを決定、右歡迎會の具體方法に就ては十一月廿四日第四回代表委員會を開き決定された　（七）東亞文化協議會出席の湯爾和同會會長以下支那側評議員廿名を十二月三日午後五時より東京會館に招待し歡迎旁々懇談を交へた。加盟團體側も二十團體代表者二十餘名出席し會場は誠に和氣藹々たるものがあつた

▲招待者　東亞文化協議會會長・湯爾和、常務理事・文元模　錢稻孫　何庭流　吳祥鳳　理事・梁亞平　侯毓汶　文訪蘇　宋介　王養怡　劉家壎　焦瑩　蘇民生　黃濟國　陳達民　彭望恕　馬志道　江人駿　梁德昭　朱西苓　唐全生　高橋君平　中西一介　祕書兼通譯・黃文雄　東亞文化協議會副會長・佐藤寛次　事務總長・赤間信義

▲主催團體側出席者（團體名五十音順）

イスラム文化協會理事	匝瑳胤次	海外事情研究會理事	清水留三郎
斯文會理事	山口察常	常議員	濱野知三郎

大東文化協會副會頭	福島甲子三	全國產業團體聯合會理事	森田良雄
東洋協會專務理事代理	酒井忠正	理事	長瀧武
常務理事	石塚剛毅	東亞同文會理事長	岡部長景
主事	一宮房治郎	理事	林毅陸
東洋婦人教育會理事	牧田武	東亞經濟調査局常務理事	佐田弘治郎
同仁會　副會頭	清藤秋子	理事	服部繁子
日華學會　常務理事	宮川米次	同盟通信社　社會部長	岡村二一
日本外交協會　幹事	砂田實	日華倶樂部　專任理事	吉見正任
日本國際協會副會長代理	田村幸策	日本經濟聯盟會常勤理事代理	村上博
日滿文化協會　評議員	山形誠一	日本商工會議所　理事	松井春生
日本文化中央聯盟副會長	原田淑人	佛教聯合會　主事	市橋覺俊
常務理事	櫻井錠二	理事長	小山松吉
常勤理事	松本學	理事	出淵勝次
	伊賀良一		

（八）十四年三月二十三日常務委員會を次で、同月二十五日代表委員會を夫々開催、小山代表委員長以下參集して、訪日北支經濟使節實業部總長王蔭泰氏外一行を迎へて歡迎大講演會を開催することに協議決定　（九）四月二日夜九段軍人會館に北支經濟使節歡迎大講演會を開催す。プログラム次の通り

▲北支經濟使節を迎へて　對支文化工作協議會代表委員長貴族院議員　小山松吉　（通譯）陳文彬

▲建設途上の新中國の希望　臨時政府實業部總長　王蔭泰　（通譯）鈕先銘　▲中國經濟人の使命

臨時政府參議　北京市商會主席　鄒泉蓀　（通譯）喩熙傑　▲新段階と日支經濟人　日本商工會議所會頭貴族院議員　伍堂卓雄　（通譯）馬登洲

財團法人　滿洲移住協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目一番地
電話銀座（57）二六三七　二六三八　三二七九

役員

會長	小磯國昭	今井五介
副會長	藤原銀次郎	生駒高常
理事長	男爵 大藏公望	加藤完治
理事	石黑忠篤	小泉六一
	岡田卓雄	下村宏
	佐藤貞次郎	砂田重政
	津崎尙武	坪上貞二
	永井柳太郎	那須皓
	橋本傳左衞門	南條金雄
	安井誠一郎	三好重道
監事	門野重九郎	伯爵 黑木三次
		鶴見左吉雄
	（常務）永井柳太郎	（常務）永雄策郎
		堀切善次郎

組織

財團法人

目的及事業

滿洲移民事業の統一ある發展を助成し、併せて滿洲產業開發に資するを以て目的とす。この目的を達成する爲次の事業を行ふものとす

（一）移民事業の促進並に後援

（二）移民事業に關する調査宣傳及紹介
（三）移住者の斡旋
（四）移住者の訓練
（五）宿泊所の設立及經營
（六）其の他移民事業達成に必要なる事項

沿革及既往事業

昭和十一年十一月創立さる。設立趣意書の一節にいはく『之を要するに滿洲の移民事業は、營利的自由企業に放任すべきでない。政府は之に對して適當なる統制と助成を爲すべく同時に國民の熱誠なる後援に俟たねばならぬ。昭和七年以來拓務省は幾多の難關を排して數次の特別農業移民を送り別に二、三民間移民事業の見るべきものあれども未だ遺憾の點が少くない。曩に現地に於て移住者の金融、土地の取得管理、生產物の處理其の他移住者に對する各種斡旋を目的とする滿洲拓植會社の設立を見たるは吾等の最慶祝に堪へない所であるが、之と同時に我が國民的支持背景の下に滿洲移民事業の達成を圖るべき國內機關の設立も亦極めて肝要である。今回財團法人滿洲移住協會を設立して、一には速かに國論を喚起して本事業に對する國策を遂行助成し、二には政府に對し本國策の遂行に當り十分なる協力と各種の便益を供與し、三には移住者及移住希望者の爲めに滿洲拓植會社と呼應提携して主として國內に於ける農業移民工作に努力せんとする所以である』と、斯くて十二年四月組織を改め財團法人となる

十三年度主要事業

（一）全國各府縣に對する一般宣傳及び分村計畫　（二）一般訓練、幹部訓練、青少年義勇軍訓練及び指導員の詮衡　（三）渡航の斡旋及び移住者の後援　（四）各種調査及び研究　（五）視察團の派遣及び視察旅行の斡旋　（六）宿泊所建設準備の進捗

財團法人　日伊文化協會

〔事務所〕東京市麴町區九段二丁目三番地
電話九段（33）二四八二

役員（加入順）

顧問　頭山滿
文部大臣　陸軍大將　男爵　荒木貞夫
元內閣總理大臣陸軍大將　林銑十郎
內閣參議衆議院議員　秋田清
貴族院議員　男爵　阪谷芳郎
衆議院議員　安達謙藏
衆議院議員　正木直彥

會長　上田康照
專務理事　原常成
理事　陸軍中將　原槽谷宗一
海軍少將　植原悅二郎
衆議院議員　坂本健吉
陸軍少將軍用犬協會副會長　福原俊丸
貴族院議員　男爵　和田久左衞門

監事　東洋紡績監査役　齋藤恒一
會計主任　小藥正一
海軍主計大佐　金子孫三郎

組織

財團法人

◇事業部門　協會の事業遂行の爲次の部門を置く

（一）學藝部　學藝部は文學、美術、學術、音樂、演藝、舞踊、スポーツ、其他學藝等に關する事務を掌る　（二）講演部　講演部は講演、講義、地方遊說等を掌る　（三）文書部　文書部は新聞、雜誌、書籍、に關する一切の事務を掌る　（四）企畫總務部　事業企畫一切及諸務一切を掌る　（五）會計部　會計部は會計事務を掌る　（五）外交部　內外外交一切を掌る

目的及事業

日伊文化を相互に紹介し之に依つて兩國民の親睦を圖るを以て目的とす。其目的を達する爲主として次の事業を行ふ　（一）東京に日伊文化會館を設置し日本美術館を伊太利ベニス市萬國美術展覽會場の日本美術館豫定地に建設す　（二）日伊學藝、藝術、其他文化の研究、奬勵、劃策及交換　（三）日伊文化に關する視察、其他諸般の仲介、援助及日伊親睦に關する諸般の施設　（四）其他本會の目的を達する爲必要と認むる事業

沿革及既往事業

昭和六年十月廿五日創立、伊太利大使館に於て發會式を擧ぐ。爾來所期の目的に向つて活動をつゞけ、或は日伊文化會館を開き、或は伊國との間に學生視察團の交換を行ひ、或は來航伊國軍艦の歡迎會、來朝同國名士の歡迎送、來訪使節への表敬歡待・記念品贈呈等、あらゆる角度より目的の遂行に盡し來つて居る

十三年度主要事業

（一）防共運動に就ての各種活動（二）防共運動强化のため別に「國際協和會」を興したること
（三）伊國に建設すべき日本美術館の準備を引つゞき行ふ　（四）國際協和會に協力し「興亞村」の建設につとむ

國際協和會

〔事務所〕東京市麴町區九段二丁目三番地
電話九段（33）二四八二

役員

顧問　元内閣總理大臣　陸軍大將　林　銑十郎
貴族院議員子爵　石井菊次郎
衆議院議長　小山松壽
相談役　樞密顧問官　松浦鎮次郎
貴族院議員　根津嘉一郎
貴族院議員東京商工會議所會頭　伍堂卓雄
内閣參議貴族院議員　大谷尊由
理事兼評議員　南洋經濟研究所長海軍少將　糟谷宗一
衆議院議員　頼母木桂吉
東京日日新聞社取締役會長　高石眞五郎
大阪商工會議所副會頭　中山太一
衆議院議員　岡田忠彦
同　大口喜六
同　小川郷太郎
日米商會主　岡崎久次郎
實業家　栗本勇之助
拓務政務次官海軍中將　八角三郎

監事　日伊文化協會長　正木直彦
前伊太利亞大使　松島肇
日本放送協會長　小森七郎
陸軍少將　坂本健吉
東洋紡績監査役　齋藤恒一

組織

會員組織

目的及事業

各國相互の認識を深め世界文化の研究發達及各國の經濟的接近に資し會員間の親睦相互援助及國際間の協和を圖るを目的とす。その目的を達成する爲次の事業を行ふ

（一）防共主義を基調とする國民外交の善導及研究　（二）各國に對する日本文化宣傳諸機關の設置及施設　（三）内外資源の調査研究　（四）各國に日本現代美術館、日本商品館、圖書館の建設　（五）學藝、藝術、演藝、スポーツ等に關する各種研究者、使節の交換派遣　（六）海外宣傳委員の派遣　（七）來朝外人の歡迎接待、購入品の仲介斡旋　（八）其他目的達成に必要と認むる一切の事業

沿革及既往事業

昭和十三年十月廿六日創立さる。趣意書の一節にいはく『吾々有志は相協力して國際協和會を設立し各國人の協力を求め廣く天下の人材を集め國際の親睦を厚くしつゝあらゆる文化の發達に資し海外宣傳誤認是正に必要なる行動を遂行せむとするものなり』と

十三年度主要事業

（一）防共諸國と各方面に亘り國民外交に盡す　（二）富士山麓に雄大なる「興亜村」の開創に着手す

日波協會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内二丁目一〇番地（仲一四號館内）
電話丸ノ内（23）五七五〇

總裁　朝香宮鳩彦王殿下
名譽總裁　李王垠殿下

役員

會長　侯爵　前田利爲
名譽會長　駐日ポーランド國大使
副會長　侯爵　德川頼貞　男爵　東郷安
理事長　男爵　三井高陽
理事　甲谷悅雄　井上庚二郎
三谷隆信　渡邊直達
鍋島直和
子爵
常務理事　郡司智麿

組織

社團法人　會員　七五名

目的及事業

波蘭の學術、及び事業の研究を奬勵し、且つ日波兩國の親善を圖るを以て目的とす

沿革及既往事業

大正十三年四月創立、所定の目的に向つて盡し來る

十三年度主要事業

會則の改正を行ふ等、目的遂行に一層の意を致し各種事業を行ふ

日華實業協會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内三丁目（東七號館内）、
電話丸ノ内（23）二七四六

役員

會長　兒玉謙次
名譽顧問　男爵　岩崎小彌太　男爵　藤田平太郎
男爵　古河虎之助　男爵　三井高公
評議員　六〇名
幹事　一八名

組織　會員組織　會員　二〇〇名

目的及事業　日華兩國の親善を企圖し、相互の經濟的發展を增進するを以て目的とす

沿革及既往事業　大正九年創立、以來兩國の親善と經濟上の提携發展に盡し來つた。その間に於て一般世間に知られて居る事業としては、かつて北支大饑饉の際、本協會は日本赤十字社その他の公共團體の後援をうけ、北支の避難民の救濟を行つたことがあり、此のとき協會は約一百萬圓の寄附金を集めて種々の活動を行つた。また彼の揚子江流域に於ける大水害の際（滿洲事變直前）には、日本商業會議所、その他關係團體と協力、罹災民に對する義捐金を集め、また物資を現地に輸送する等のことを行つた。かゝる非常の場合の外、常に日支間の經濟提携とその發展につくし來り、日支經濟問題の起る度ごとによき解決にと意をそゝぎ活動を重ね來つた

十三年度主要事業

幹事會、懇談會其他による時局善處

其

他

國立・公園協會

〔事務所〕東京市麹町區大手町（厚生省體力局内）
電話丸ノ内（23）〇二一一—〇二一九、

役員

會長　侯爵　細川護立
副會長　厚生次官　岡田文秀
常務理事　永井浩　林博本多靜六
　　末松偕一郎　林博田村剛　高久甚之助
　　灘尾弘吉　法博渡邊錠藏　小川仙二
主事　醫博　南崎雄七　高田寛　辻村太郎
　　冠松次郎　清水秀

組織　會員組織　支部　一七ヶ所

目的及事業　國立公園事業の促進を以て目的とす

沿革及既往事業

昭和四年二月創立、以後次の事業を行ひ來る（一）機關誌の發行（二）國立公園指定促進運動

十三年度主要事業

（一）昭和十三年七月和蘭國アムステルダムに開催の萬國地理學協會へ國立公園寫眞額面用十二枚及同配置圖を出品（二）富士裾野騎乘會開催　昭和十三年八月二十日二十一日兩日を以て日本乘馬協會と共同主催にて富士裾野騎乘會開催來會者百餘名（三）風景指示盤の建設　昭和十三年十二月二十三日及二十五日富士山麓精進パノラマ臺及同地域内三ッ峠山頂へ風景指示盤各一基建設（四）國立公園スキーの會　昭和十四年二月一回、三月一回、奥日光、富士山麓及中部山岳乘鞍岳に於て國立公園スキーの會を開催の豫定

社團法人 日本放送協會

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目二番地
電話（代表）銀座（57）七七五一

役員

總裁　公爵近衞文麿
會長　理事小森七郎
理事（常務）清水順治（同）關正雄　米澤與三七
　　山崎晃　安光元一　佐々信一
監事　中郷孝之助　船水喜幸（外に理事一四名）
　　築田鈆次郎（外二名）

組織

社團法人　會員　五、四六九名
職員數　直轄　約二、〇〇〇名　地方　約二、三〇〇名
業務組織

會長—專務理事—常務理事
- 庶務部（人事、文書各課）
- 監査部
- 調査部
- 總務局（經理、計畫、加入、料金各部）
- 業務局（報道、教養、文藝、各部、査閲、庶務各課、放送委員會）
- 技術局（工務、技術各部）
- 技術研究所

- 臨時建築部
- 編成部
- 大阪、名古屋、廣島、熊本、仙臺、札幌、各中央放送局（各部課係、並に放送局二十八局）

目的及事業

主務官廳に依り認許せられたる無線電話放送事業、其の他の無線電氣通信事業を經營し且つ無線電氣通信の進歩發達を圖るを以て目的とす
本會は前項の目的に附帶する事業を經營し又は前項の事業經營に必要なる他の事業に出資することあるものとす

沿革及既往事業

大正十三年十一月、社團法人東京放送局の開始に次で、同十四年一月名古屋、同二月大阪と相次ぎ單獨の放送局設立許可せられたが、大正十五年八月前記三法人合併して日本放送協會を組織し東京に本部を、全國七ヶ所に支部を置く。後、昭和九年五月關東支部を本部に合併し關西支部以下五支部を廢し之を中央放送局とし業務の刷新改善を圖り今日に至る。なほ出版物として刊行するもの次の通り（定期）『放送』『業務統計要覽』『ラヂオ年鑑』（不定期）各種『テキスト』『放送調査資料』『技術調査及研究報告』『技術參考資料』

十三年度主要事業

この年度には釧路、弘前、盛岡、松本の四放送局を開局し聽取加入者の數は十三年十二月に於て四百萬を突破するの盛況を見た。又昭和十年度より着工せる東京放送會館はこの年十二月竣工、從來の借事務室を廢し麴町區內幸町に堂々たる無線文化の殿堂を築き又放送內容に於ても國內放送の充實、海外放送の擴張等、時局に對處して遺憾なきを期した

社團法人 日本犬保存會

〔事務所〕東京市世田谷區世田谷二丁目一三二一番地

役員

會長　横山助成
副會長　猪野毛利榮　京野兵右衞門　北村勝成
專務理事　板垣四郎　平岩米吉　山口織之進
里田原三

組織

社團法人

會長、副會長各一名、專務理事の六名、理事三〇名以内を正會員中より選擧、正會員の他に顧問相談役、特別會員、賛助會員を推薦す

會員　一〇六五名

目的及事業

日本犬の保護蕃殖、竝に日本犬に關聯せる諸般の研究、各種使役に對する利用增進、體型能力の向上と改良發達を圖り、日本犬により公益のために寄與貢獻し、我國文化の向上に資するを以て目的とす。この目的達成の爲め次の事業を行ふ

(一) 日本犬の蕃殖管理の指導統制
(二) 日本犬標準の決定

(三) 日本犬々籍簿の發行
(四) 會誌其他公報の發行
(五) 日本犬に關聯せる人類學、考古學、動物學等の研究
(六) 展覽會、能力體力に關する試驗會等の開催、其他

沿革及既往事業

昭和三年五月創立、同七年全國的會員組織となり、同十二年三月內務省認可社團法人組織に改組この間大阪に關西總支部、其他全國に十數個所の支部設置を見て現在に到る

事業中主要なるもの次の通り

(一) 昭和五年、秋田產日本犬の天然記念物指定を始め全國各地產日本犬の指定斡旋
(二) 昭和七年十一月、第一回全國日本犬展覽會開催、今日まで七回を重ぬ
(三) 全國各地支部、連繫團體展覽會に審査員を派遣す
(四) 訓練講習會、其他講演會多數開催
(五) 忠犬ハチ公銅像建設發起
(六) 年一回猪鹿獵テスト擧行
(七) 昭和十年軍用犬耐久力試驗會に參加、最優秀成績を收む
(八) 毎月機關誌『日本犬』發行
(九) 日本犬の諸外國への紹介　(一〇) 日本犬々籍簿第一卷發行

十三年度主要事業

(一) 第七回全國日本犬展覽會開催　(二) 訓練競技會開催　(三) 兵庫縣杉原谷獵區に於て公開猪鹿狩擧行　(四) 警視廳警察犬の養成　(五) 北支派遣軍に支部を通じ軍用犬献納
(六) 月例研究會開催

社團法人 同盟通信社

〔事務所〕東京市京橋區銀座西七丁目一番地
電話(代表番號)銀座(57)二一二一 六一六一

役員

社長 岩永裕吉
理事會々長 田中都吉
常務理事 畠山敏行
上田碩三
參與 伊藤正德
常務監事 古賀傳吉
庶務部長 大川幸之助

組織

社團法人

本社の社員は、我國に於て日刊新聞を發行する新聞社及び無線電信、又は無線電話に依り放送事業を經營する者を以て組織し、十三年末加盟社員總數二〇六社

古野伊之助
堀義貴

本社は世界通信聯盟に日本を代表する通信社として加盟し、且つ日本に於ける唯一の公益法人組織に依る通信社たり

從業員總數 二二〇〇餘名

目的及事業

正確公平なる報道の普及と、國際的諒解の增進に資するため、內外の『ニュース』を蒐集編纂し之を社員並に海外の通信社、及び新聞社に迅速適確なる方法に依り通報することを以て目的とす

沿革及既往事業

本社は昭和十一年一月一日、新聞聯合社の業務一切を繼承し、同年六月一日、日本電報通信社通信部の業務を繼承し現在に及ぶ

十三年度主要事業

支那事變の繼續に因り、記者、無線通信士、寫眞班員、映畫班員等の從軍特派員二百三十名を現地に派遣(內五名は戰死殉職)し皇軍の活動を銃後に通報し、且つ海外に既設支局の外十支局を新設し、是等支局をして事變の眞相を報道せしむると共に、海外通信網の擴充に資した

海軍協會

〔事務所〕東京市麴町區丸ノ内二丁目二〇番地（郵船ビルディング内）
電話丸ノ内（23）二七九八　二七七二

役員

會長　有吉忠一
副會長　海軍中將　飯田久恒
常務理事　和田純　海軍少將　廣田穣
海軍少將　祝原不知名

組織

社團法人、會員　二一八、九五七名（昭和十三年十一月末現在）

目的及事業

海軍、海運其他の海事知識を一般に普及し、併せて海軍力の完成維持に貢獻するを目的とす
この目的を達する爲め次の事業を行ふ
（一）調査機關を設け内外の海軍、海運其他の海事に關する諸般の事項を調査研究する事　（二）會員の軍艦、軍港等見學は勿論一般國民の見學上便宜を圖り又講演會、活動寫眞會等を開催すること　（三）會報、雜誌、年鑑、書籍等を刊行すること　（四）海軍記念日（五月二十七日）を尊重し本會主催者となり毎年當日各地に集會を開き特に海軍其他の海事思想の鼓吹奬勵に努むる事

沿革及既往事業

東京商業會議所を中心として、各方面の士相謀り、大正六年十月、男爵目賀田種太郎氏以下五百五十名が發起人となり、築地精養軒に本協會創立發會式を擧ぐ。以來爲し來つた事業中主要なるもの次の通り

（一）海軍々備、竝に海軍政策に關する意見書等の發表（大正六年、八八艦隊計畫に關し首相其他へ意見書提出、其他）（二）第一次倫敦海軍々縮會議に際し、本會内に臨時軍縮問題調査委員會を設く（三）昭和七年壽府海軍々縮會議、同十一年第二次倫敦海軍々縮會議の際も同樣（四）その他海軍々縮會議に當り後援運動を爲す（五）講演會、懇話會等の開催（聽衆數計、昭和九年度六十餘萬人、十年度四十二萬餘人、十一年度四十一萬六千人）（六）博覽會、展覽會等の開催（大正九年、海軍奬勵會主催の展覽會を後援、以後本會主催のもの其他五回）（七）威仁親王殿下德洋記念碑の建立を主唱斡旋す（昭和六年）（八）元寇記念事業の動機を作る（同上）（九）海軍記念日に對する國民的認識の促進を圖る（一〇）東都七大學學生國防聯盟を援助す（一一）日本モーターボート協會主催事業の後援（一二）觀艦式に際し傭船して會員に拜觀を爲さしむ（昭和五年の神戸沖以降）（一三）恤兵金、義捐金、慰問金の募集（昭和七年上海事變以降）（一四）報國號飛行機の獻納（一五）機關雜誌『海之日本』の發行（一六）圖書刊行（大正十年の海軍童話『軍艦の話』以降數種）。其他パンフレット多數配布（一七）副會長飯田中將以下四名、上海に第三艦隊を慰問。海洋美術展開催。財團法人海軍館の完成に援助

（以上昭和十二年）

十三年度主要事業

（一）海軍展覽會を佐世保（二回）、高松、金澤、神戸、福井の各市に於て開催
（二）海軍從軍畫家スケッチ展覽會を四月東京市に於て開催したるを初めとし爾後横須賀、大阪、名古屋、函館、札幌、神戸、吳、廣島、高松、福岡、佐世保、長崎の各市に於て開く
（三）第二回海洋美術展覽會を五月東京市に於て開催
（四）小學校長の海軍軍事講習を八月横須賀、吳、佐世保の各軍港及び舞鶴要港に於て行ふ、實施府縣（括弧内は講習員數）群馬縣（五三）栃木縣（五四）東京府（九三）岡山縣（六六）鳥取縣（四一）長崎縣（五八）佐賀縣（三九）京都府（五〇）
（五）中等學校生徒の海軍軍事講習を七、八月に亘り大阪府下男子中等學校生徒に對し行ふ、實施校數四五、人員職員一〇七、生徒一、六九五
（六）海軍機渡洋爆撃行の一周年記念日（八月十四日）東京市に於て記念講演映畫會を催す
（七）軍艦旗制定五十年記念祝典講演映畫會を十一月東京市初め各地に於て擧行、尙大阪市、和歌山市及び津市に於て記念展覽會（十月より十二月に亘る）を開催
（八）海軍記念日祝典講演映畫會等を全國各地に行ふ
（九）支那事變と海軍に關する講演映畫會を全國各地に於て多數頻繁に開催
（一〇）海陸軍への會員醵出の恤兵金累計金九千八百參拾八圓參錢となる
（一一）『支那事變海軍報國美談輝く忠誠』自第三輯至第六輯各一萬部發行
（一二）この一年間に增加したる會員數約三萬五千人

日本文化聯盟

〔事務所〕東京市麴町區内幸町二丁目（大阪ビルディング新館七階）
電話銀座（57）一四五五

役員

代表者　松本學

組織

參加團體次の如し（五十音順）

新日本文化の會
日本古武道振興會
日本體育保健協會
日本民俗協會
傳記學會
日本兒童文化協會
日本體育保健協會内　建國體操の會
邦人社

【參加團體の事業其他はそれ〴〵の會の部參照】

設立及目的

昭和八年七月創設
日本精神の顯揚、新日本文化の建設を目的とす

日本文化中央聯盟

財團法人　日本文化中央聯盟

〔事務所〕東京市麴町區內幸町二丁目一番地ノ三（大阪ビル新館內）
電話銀座（57）一一八七【總務部・文化事業部・國際部】
一一三九【理事室】五一八一（ビル交換）【研究調査部】

役員（五十音順）

會長　公爵　島津忠重
理事長　小山松吉
理事（常務）伊東延吉（常勤）伊賀良一（常務）井上庚二郎
工博　子爵　大河內正敏　江口定條　子爵　岡部長景
（常務）菊池豐三郎　大倉邦彥　河原春作
法博　下村宏　香坂昌康　伯爵　酒井忠正
（常務）松本學　膳桂之助　文博　高楠順次郎
監事　伯爵　樺山愛輔　水野梅曉
參事　安藤烝　矢野恒太

組織

財團法人

【加盟團體及會員】（一）本聯盟に加盟せむとする團體は理事會の承認を承くること（二）本聯盟の趣旨に贊同し會費を納付するものは次の各號に依り會員に推薦さる（イ）正會員　會費

年額十圓以上を納付するもの　(ロ)、特別會員　會費年額五十圓以上を納付するもの　(ハ)　五箇年以上會費を納付したるもの、又は一時に之を完納したるものは當該終身會員に推薦さる(ニ)本聯盟の事業に贊助するものは理事長より贊助會員に推薦さる　(ホ)　本聯盟の事業に關し特に功績ありしものは、理事會の議決を經て有功會員に推薦し其の榮譽を表彰さるゝことあり

【部課組織】　四部に分る　(一)　總務部　(二)　研究調査部　(三)　文化事業部　(四)　國際部

目的及事業

肇國の理想に則り、我國文化の綜合進展を圖り、其の眞髓を發揮し、之を中外に宣揚し、以て國運の伸長並に世界文化の興隆に貢獻することを目的とす

この目的を達成する爲め次の事業を行ふ

(一)　新日本諸學の建設並促進其他諸般の研究調査を爲すこと

(二)　國民の自覺に關する施設運動を爲すこと

(三)　日本文化史、日本文化百科辭典、其他著作、編纂、飜譯、出版等を爲すこと

(四)　國史記念館、日本文化圖書館、日本民俗博物館、其他の文化施設を爲すこと

(五)　日本文化展覽會の開催、其他講演會、座談會、演奏會等を開催すること

(六)　日本文化賞の設定、其他內外に亘り團體、個人の選賞を爲すこと

(七)　常設綜合產業館の開催並促進、其他產業振興施設を爲すこと

(八)　海外文化駐在員の設置を促進すること

(九)　日本文化萬國大會、其他國際會議を開催すること

(一〇)　內外に於ける關係團體、個人と聯絡協力し又は其の事業を援助すること

沿革及既往事業

皇紀二千六百年を記念し　神武天皇御創業の御理想を回想し奉り、光輝ある日本文化の認識を新

にし、以て民族的躍進の契機たらしむると共に、新日本文化の建設に努め、其の眞髓を中外に宣揚するは　神武御創業の聖旨に副ひ奉る所以なるを想ひ、之が記念事業として官民合同の有力なる機關を組織し、各種國內的、並に國際的文化事業を起すべく、志を同じうする馬場鍈一、岡部長景、大倉邦彥、高楠順次郎、潮惠之輔、矢野恒太、松平頼壽、松本學、小山松吉、香坂昌康、江口定條、酒井忠正、櫻井錠二、水野梅曉、下村宏（以上氏名イロハ順）等廿四氏相集り協議を重ねたる結果、昭和十一年一月二十四日、意見書を附して右趣旨の建議書を政府に提出した

然るに同年七月に至り、內閣に紀元二千六百年祝典事務局並に同祝典評議員會設置せらるるに及び、右建議の趣旨を審議せられ、意見書中に擧げられた參考事項十五文化事業の內、日本文化大觀の編纂を採擇し、恒久的團體の組織と、他の事業に付ては更に別途の計畫にゆづられることとなつた。玆に於て日本文化中央聯盟を結成し、之を財團法人の組織とし、建國以來生成發展したる日本文化の眞髓を發揚し、進んで新日本文化の建設を企圖し、之を中外に顯揚すると共に眞に　皇紀二千六百年を記念するに適切なる事業を起し、一面各方面の理解ある人士と協力し、又洽く文化關係團體と連絡提携し、官民一致、以て所期の目的を達成せしむることに盡力すべく意見の一致を見るに至り、先づ前記二十四氏が發案者となり、財團法人日本文化中央聯盟を組織する準備に着手した。會合を爲すこと數十回、其の間に設立趣意書案、事業要綱案、寄附行爲案の起草を終つた。一面政府に於ても其の事業費に對する補助金十五萬圓を昭和十二年度豫算中に編成せられ、帝國議會の協贊も成立した。かゝる間に、時局の推移より日本文化中央聯盟の結成は愈々急速に爲さるべき必要に迫られ、十二年七月十六日、文部次官伊東延吉氏は、發案者一同を文部大臣官舍に招待したが、聯盟の組織、事業等に關し文部省側と發案者一同との間に意見の一致を見たので、愈々組織を促進することとなつた。斯くて翌八月八日、大阪ビルディングに設立發起人會を開催し、小山松吉氏を座長に推し、其の司會の下に滿場一致、寄附行爲、設立趣意書事業要綱及び會長、副會長、理事、監事等の役員、其の他一切の議案を可決確立、同時に聯盟の

設立を決定し、文部大臣に對し財團法人の許可申請を爲し、九月十七日付を以て、大臣より設立許可あり、同月三十日設立登記を完了、こゝに日本文化中央聯盟は誕生した

創立直に事業に着手、同年度内に爲されたる主要事業の項目を擧ぐれば次の通り

◇研究調査部關係　研究員、並に研究助成員に付ては、各大學、學會等に推薦方を紹介し、銓衡の結果、研究員十名、研究助成員六名を採用、東京帝大講師原田敏明氏を迎へて、その指導下に直に所定の研究に着手した

◇文化事業部關係　自覺啓發施設としては、政府主唱の國民精神總動員と呼應し次の諸事業を行つた

(一)　時局と國民自覺大講演會

第一回、東京市日比谷公會堂（十月十五日）より、第五回名古屋市公會堂（同十五日）まで

(二)　國民自覺運動パンフレット刊行　第一輯より第七輯まで

(三)　講習會（第一回「時局と國民自覺」指導者講習會）

(四)　映畫製作着手

(五)　紙芝居用畫の製作

(六)　懸賞募集　(イ)　ポスター　(ロ)　歌詞　(ハ)　標語

(七)　月刊會報『文化日本』の發行

◇國際部關係　(一)　季刊外國文雜誌『カルチユラル・ニツポン』の發行（外國の諸大學、文化團體、有識者等に日本文化を紹介する學究的雜誌）　(二)　諸外國に於ける文化運動の調査

(三)　ゴルハム、押川兩夫人を米國に派遣、華道を通じて日本文化の眞精神を紹介せしむ　(四)　日本文化萬國大會の基礎準備を始む

◇關係團體との連絡提携　(一)　參與會を開催、連絡打合せを行ふ　(二)　『日本文化團體年鑑』を編纂、官公署、關係團體等に配布　(三)　對支文化工作協議會の結成

十三年度主要事業

◇一、研究調査施設に關する件

(一)　講讀會　日本書紀講讀會を四月十四日より開催し九月三十日終了

(二)　研究座談會　(1)　七月一日聯盟會議室に東京帝國大學教授中村孝也氏を聘し「古代日本歷史研究の態度」に就て講話を聞き、引續き該問題に關し座談會を催す　(2)　七月二十七日聯盟會議室に開催、研究發表者研究助成員矢野安房「日本教育の淵源」に關する中間報告あり、終了後座談會を開催　(3)　十月一日聯盟會議室に開會、研究發表者研究助成員佐藤龍兒、研究題目「奈良朝の思想文化に及ぼせる支那文化の影響」に關する中間報告あり終了後座談會を開催　(4)　十月十三日、聯盟會議室に開會、講師研究指導員大串兎代夫、題目「國家學の動向」　(5)　十一月十八日、聯盟會議室に開會、研究發表者研究員國弘員人、題目「カルテルと物價統制」引續き座談會を催す　(6)　十二月十七日聯盟會議室に開會、研究發表者研究助成員川崎英策、題目「國民所得と國民貯蓄に就いて」引續き座談會　(7)　二月四日、聯盟會議室に開會、研究發表者研究助成員谷本揆一、題目「現代日本人の性格に就いて」引續き座談會

(三)　視察調査　(1)　五月六日千葉縣清川村に赴き上代文化の遺跡を見學、原田指導員外一行研究員七名　(2)　九月二十四、五兩日茨城縣側高村附近に至り「日本古代に於ける神社信仰並社會制度研究の參考資料蒐集」の爲視察調査をなす、原田指導員外研究員三名　(3)　十月十四五、六日三日間研究員國弘員人、京都、大阪兩市の間屋並工業組合を視察し「經濟統制組織研究」の調査をなす　(4)　十二月一日、日本祭祀學研究の爲、原田指導員外研究員三名、香取神宮大饗祭を見學

(四)　學會派遣　(1)　十月十六、七兩日大阪市に開催の東京帝國大學文學部内漢學會並財團法人斯文會主催の第七回漢學大會及近畿漢學教員協議會に研究員高橋峻出席、尙右研究員は同會に「周易と尙書の月の四分法に就て」研究發表した　(2)　十一月十九日開催、京都帝國大學文學

部聯合大會の中哲學會に研究員木村俊夫出席聽講す

(五) 研究員並研究助成員 (1) 研究員 研究員は夫々所定の項目に付研究を爲さしめ之に對し研究指導員原田敏明氏外三名をして研究調査の綜合統一を圖り且各研究員を指導せしむ、而して現在研究指導員四名、研究員十一名にして、その研究未だ途中にあり、現在までの成果次の通り

一、上代に於ける國史編纂に就いての一考察 研究員 阿部武彦 一、日本書紀の編纂に就いて(特に使用語句を中心として見たる) 研究員 鴻巣隼雄 一、大和朝廷の政治理念と國造の政治觀 研究員 橋本實 一、祖先崇拜の研究 第一部(古典に於ける親緣關係に就いて) 研究員 安津素彦 一、皇室を中心とする氏族統合の過程(日本書紀を中心とする文獻的研究) 研究員 森田誠一 一、書紀編纂者の思想に就いて(使用語句による原典批判的研究) 研究員 木村俊夫 一、繼統法から見た支那の國家觀念(附周易と尙書の月の四分法に就いて) 研究員 一、我が建國の古傳承より觀たる國體の本義 研究員 星野弘一 一、計畫經濟の理論 研究員 國弘員人 一、憲法學に於ける國體の概念 第一部(日本憲法學史上に於ける國體の概念) 研究員 八條隆孟 一、支那民族主義の理論と實踐 研究員 神谷正男 (2) 研究助成員 研究助成員は現在一〇名にして各研究を續けつつあり、右の中既に一應の研究を終了したるもの次の通り 一、日本教育史概觀 其の一(日本教學の本源) 研究助成員 矢野安房 一、我國庶民の精神生活について 其の一(上代庶民の精神生活) 研究助成員 堀一郎 一、奈良朝の思想文化に及ぼせる支那文化の影響 研究助成員 佐藤龍兒

◇二、自覺啓發施設に關する件、(一) 講演會 (1) 時局と國民自覺大講演會 第六回(四月九日) 水戸市茨城會館、聽衆約一、六〇〇人 第七回(四月十八日) 甲府市春日小學校、聽衆約七〇〇人 第八回(四月二十五日) 宇都宮市教育會館、聽衆約五〇〇人 第九回(五月二十五日) 山形縣會議事堂、聽衆約一、〇〇〇人 第十回(五月二十六日) 仙臺市公會堂、聽衆約二、五〇〇人 第十一回(九月二十五日) 金澤市第四高等學校、聽衆約八〇〇人 第十二回(九月二十九

日) 長野縣立圖書館、聽衆約一、三〇〇人 第十三回(十月三日) 新潟市公會堂、聽衆約二、〇〇〇人 第十四回(十一月三十日) 浦和市埼玉會館、聽衆約一、三〇〇人 第十五回(十二月一日) 千葉市教育會館、聽衆約一、一〇〇人 第十六回(十二月七日) 靜岡市公會堂、聽衆約二、〇〇〇人 第十七回(十二月十二日) 岐阜市公會堂、聽衆約二、〇〇〇人 (2) 時局と國際關係大講演會 七月十二日、日比谷公會堂に開催、聽衆約三、〇〇〇人 (二) 講習會「時局と國民自覺」指導者講習會 第二回講習會は八月四日—同六日迄、青森縣下十和田湖畔、十和田觀光館に於て開催、一道十縣三十四市から推薦されたる受講者七十一名參加 第三回講習會は十月二十七日より同二十九日迄、福岡市社會教育會館に開催、西日本十七縣より推薦されたる受講者八十六名參加

(三) パンフレット(時局と國民自覺大講演集) 第八輯より第十八輯まで

(四) 國民自覺叢書 第一編より第三編まで

(五) ポスター 縣賞當選一等ポスター一萬枚を印刷し全國各方面に頒布

(六) 定期刊行物(文化日本) 昭和十三年四月號(第二卷第四號) より昭和十四年二月號(第三卷第二號) 迄各五、〇〇〇部印刷、關係方面へ配布

(七) 講師派遣 四月一日神奈川縣茅ヶ崎町男女青年團、在鄕軍人分會合同總會へ本聯盟評議員參與大串兎代夫氏、四月二十三日栃木縣芳賀郡教育會へ本聯盟評議員參與川原次吉郎氏、五月二十五日千葉縣佐倉中學校、七月二十九日より同三十日迄愛知縣幡豆郡教育會へ本聯盟評議員參與川原次吉郎氏、八月二十九日埼玉縣神職會講習會へ本聯盟常務理事松本學氏、同評議員參與川原次吉郎氏を派遣す

(八) 映畫 (1) 「牧場物語」試寫會 本聯盟及東寶映畫株式會社提携作品映畫「牧場物語」試寫會を八月二十三日、日比谷映畫劇場に開催、各國使臣、關係諸官衙團體、內外新聞記者等約一、〇〇〇名を招待した (2) 「牧場物語」映畫公開 九月一日より東寶關係全國約二〇〇の

映畫館に上映公開し觀覽延人員一五〇、〇〇〇餘に達す　(3)　映畫複製　自覺啓發運動に使用の爲「牧場物語」プリントを作製し戰傷病者慰問、其の他講習會、講演會に使用す　(4)　戰傷病者慰問映畫會　十一月一日より四日間第一陸軍病院に於て「牧場物語」を上映引續き二十四、二十五の兩日第二病院、十一月三十日、十二月一、二日の三日間第三病院にて上映す

(九)　レコード　(1)　懸賞募集歌詞當選作「大日本の歌」及「若い日本だよ」の二曲をレコードに吹込み廣く愛唱せしむる爲コロンビヤ、ビクター兩社に於て之を作製し、一般市場に發賣中

(2)　戰傷病者慰問の爲本聯盟撰定「大日本の歌」及「若い日本だよ」レコードを陸軍病院宛二一六枚、海軍病院宛二〇枚を寄贈す

(一〇)　懸賞當選歌譜本　「大日本の歌」及「若い日本だよ」譜本各五、〇〇〇部を印刷し各方面へ頒布す

(一一)　演藝家總動員　(1)　「大日本の歌」　發表大演奏會　銃後後援强化週間中十月十一日、日比谷公會堂に開催、聽衆約三、〇〇〇名　(2)　「大日本の歌」及「若い日本だよ」歌曲指導　昭和十三年十月十日より黑田謙氏に依頼し東京、神奈川、千葉、群馬、栃木、岡崎、豐橋、名古屋、靜岡等各地方に於ける有數工場從業員に對し「大日本の歌」及「若い日本だよ」歌曲指導を爲しつつあり　(3)　紙芝居畫製作　「極東」(二八卷)外十三篇通計二五九卷を完結す

(一二)　勤勞青年の讀書傾向調査　勤勞青年層の文化的向上と其の國民的自覺心の啓發に資すべき事業の準備として左記要項を調査に着手した

記

一、調査の目標　年齡、作業、學業、性別に依り讀書傾向の動きを調査
一、被調査人員　約五、〇〇〇名
一、年齡の範圍　十五歲乃至二十五歲
一、工場數　京濱所在の十五工場(第一次)

一、調査事項　讀書に對する好惡其の他六項目

(一三)　皇紀二千六百年奉祝歌曲及舞踊創定　皇紀二千六百年を迎へんとするに方り之が奉祝の一大歌曲及舞踊を創定し以て國內は固より更に言語と國境を越えて現代日本藝術の精華を遍く宣揚する爲、各斯界の第一人者の參會を得、之が準備協議會を一月十七日より開催、續いて左記部會を設け各部共會合を重ね其の具體案の協議を進めつつあり

第一部(歌詞)委員一一名、第二部(洋樂)委員一八名、第三部(新日本音樂)委員九名、第四部(長唄)委員一二名、第五部(舞踊)委員二一名

(一四)　皇紀二千六百年奉祝演劇　皇紀二千六百年を奉祝し、新日本文化の建設に資せん爲、演劇界の關係有力者を網羅して一月二十七日より左記各部に依り準備協議會を重ね具體案を講究しつつあり

第一部(操淨瑠璃、歌舞伎、新派、レヴュー、舞踊劇)委員二八名、第二部(獨立劇團)委員一五名、第三部(新劇團)委員二七名、第四部(ページェント及調査連絡等)委員一五名

(一五)　映畫原作小說懸賞募集　本聯盟は昭和十三年十二月、朝日新聞社「週刊朝日」と相提携し「文化日本」及「週刊朝日」の各號に映畫原作小說懸賞募集を發表(締切期日昭和十四年二月末日)應募作品一千二十七篇中より次の二篇當選す　▲一席(賞金一千圓＝愛國公債)「土の茂作」中野重男　▲二席(賞金五百圓＝同右)「夜逃げ」菊地文雄

◇三、海外宣揚施設に關する件

(一)　カルチユラル・ニツポン(季刊外國文雜誌)　(1)　第六卷第二號(七月十五日附發行)一、五〇〇部　(2)　第六卷第三號(十一月十五日發行)一、五〇〇部　(3)　第六卷第四號(十二月二十五日發行)一、五〇〇部　(二)　亞細亞學生の會　四月例會(ジヤバ文化の夕)學生四十七名出席　五月例會(支那文化の夕)陳清金氏外學生六十名出席　十一月例會映畫「牧場物語」觀覽、出席者學生十五名　十二月例會出席者學生二十五名、昭和十四年一月例會出席者學生十名、

二月例會出席者學生十名、　二月二十三日　石川通司氏の講演あり出席者學生十名、
(三)「國際友愛の夕」映畫會　五月十九日(畫の部午後三時、夜の部午後七時の二回)帝國劇場に於て本聯盟及日波協會、日本赤十字社、福田會、國際文化振興會、松竹株式會社協同主催の下に　(イ)　映畫「アヴエマリア」(ロ)　映畫「未完成交響樂」(ハ)　映畫「ポーランドの孤兒」
(二)　ポーランド極東青年會の天長節に奉祝放送せるレコード　(ホ)　映畫「月光の曲」(ヘ)
實演「踊るリズム」等を施行、晝夜を通じて各國大公使及關係者、外國新聞記者、在留各國人有志、內外人四〇〇名を招待した
(四)　華道講習及茶話會　(1)　講習會及茶話會　八月十三日小石川區同心町、松風流生花學校に於てカナダ、ハイスクール女教員團に對し押川如水女史指導の華道講習あり、引續き茶話會を開催した　(2)　京濱在留外國人に對する講習會　一、日時　毎週木曜日　一、會場　大阪ビル內、レインボーグリル
右は華道を通じて外國人の日本文化の理解研究を助成せんことを目的として、華道松風流押川如水、ヘーゼル・H・ゴルハム兩女史に囑託し十三年十月六日之を開始し、爾來引續き實施中　(3)　國際觀光局招聘濠洲女教員團一行五名を小石川松風流講堂に招待、押川女史より生花、茶の湯を講習し茶話會を開催す
(五)　ヒツトラー・ユーゲント歡迎　(1)　ヒツトラーユーゲント映畫會　八月二十四日輕井澤會館に於て東寶映畫株式會社と協同主催にて一行三十一人に映畫「牧場物語」を觀覽せしむ
(2)　ヒツトラー・ユーゲント歡迎日本古武道型大會
一、日　時　十三年九月十五日
一、會　場　神田區一ツ橋、國民體育館
一、參會者　ヒツトラー・ユーゲント一行三十一名、オツト獨逸大使、外在京獨逸人、其の他
來賓四〇〇名
一、演　武　日本古武道の型、陣貝、薙刀術、居合術、柔劍術、弓術、其の他

◇四、助　成
▲第六回音樂週間理事會に對し金參百圓を助成(昭和十三年十月廿一日)第六回音樂週間「音樂個人コンクール、千人の合唱、五萬人の合唱、吹奏樂コンクール」等　▲新日本文化の會(代表者、佐藤春夫)に對し金壹千五百圓を助成(昭和十三年十二月二十六日)　同會機關誌「新日本」昭和十四年一月號を「傷痍軍人慰問號」とし陸、海軍病院へ寄贈一萬部實費、而して昭和十四年一月七日海軍、一月八日陸軍各恤兵部へ寄贈の手續を終了した
◇五、參與會
第四回參與會(四月二十日)本聯盟理事理化學研究所長大河內正敏氏の「理化學研究所の事業」に就て說明があつた。第五回參與會(五月三十日)本聯盟評議員參與、產業組合中央會理事千石興太郎氏、「時局下に於ける產業組合の活動」に就いて說明があつた。第六回參與會(六月二十九日)本聯盟評議員參與、東洋協會理事大藏公望氏、「東洋協會の事業」に就いて說明があつた。第七回參與會(七月十八日)本聯盟評議員參與、國際觀光協會專務理事、田誠氏、「國際觀光事業」に就いて米國視察談があつた。第八回參與會(九月十三日)第一回東亞文化協議會に日本側代表として列席の本聯盟理事長小山松吉、同理事酒井忠正兩氏より同協議會に關する經過に就いて說述があつた。第九回參與會(十月二十四日)本聯盟評議員參與產業報國聯盟常務理事町田辰次郎氏、「產業報國運動」に就いて說明があつた。第十回參與會(十一月二十八日)本聯盟評議員參與大日本少年團聯盟理事長二荒芳德氏、「日本及世界各國に於ける少年團に就いて」說明があつた。第十一回參與會(十二月十四日)本聯盟評議員參與、國民精神文化研究所長關屋龍吉氏、「國民精神文化研究所の事業に就いて」說明があつた。第十二回參與會(一月二十六日)本聯盟理事、東洋大學學長大倉邦彥氏、「我國教育の行くべき途」に就いて說述があつた　第十三回參與會(二月二十三日)本聯盟評議員參與、恩賜財團軍人援護會理事長富田愛次郎氏、「軍人後援會の事業に就いて」說明があつた

◇六、財務委員會に關する件

財團法人日本文化中央聯盟財務委員（十三年七月組織）

財務委員長　根津嘉一郎

（東京）評議員　淺野良三

同　池尾芳藏

同　磯村豐太郎

理事　江口定條

評議員　門野重九郎

同　鈴木忠治

理事　醍醐桂之助

評議員　原邦造

同　橋本圭三郎

同　藤山愛一郎

監事　矢野恒太

（名古屋）評議員　青木鎌太郎

同　豐田利三郎

（京都）評議員　大澤德太郎

（大阪）評議員　稻畑勝太郎

同　庄司乙吉

同　村田省藏

（神戸）評議員　津田信吾

（九州）評議員　松本健次郎

評議員　明石照男

同　井坂孝

同　今井五介

評議員　男爵大倉喜七郎

同　子爵澁澤敬三

同　杉野喜精

評議員　高島誠一

同　根津嘉一郎

同　藤原銀次郎

同　男爵森村市左衛門

同　伊藤次郎左衛門

同　田中博

同　片岡安

同　堀啓次郎

附　官設機關

外務省文化事業部

〔所在地〕東京市麴町區霞ヶ關（外務省內）
電話銀座（57）五一一一

職員

文化事業部長　三谷隆信（條約局長兼任）
第一課長　宮崎申郎
第二課長　市河彥太郎

目的及事業

第一課――對滿支文化事業　第二課――國際文化事業（滿・支を除く）

沿革及既往事業

第一課　昭和二年創設
第二課　昭和十年八月設置（舊第三課）

十三年度主要事業

（一）日本文化關係諸講座及日本語教授機關助成　（二）日本文化研究及紹介機關助成　（三）內外學者交換派遣招請等助成　（四）內外學生交換派遣招致等助成　（五）各種藝術相互紹介等助成　（六）各種國際文化事業團體補助

この年官制の改正あり、舊第一課第二課を合して第一課とし、舊第三課を第二課と改稱す。而て大陸現地に於ける事業は興亞院に移管す

帝國藝術院

〔事務所〕東京市麴町區霞ケ關（文部省專門學務局內）
電話銀座（57）五七七一—五七七九

職員

院長　法博清水澄

會員
朝倉文夫　荒木悌次郎（十畝）　有島壬生馬（生馬）
石井滿吉（柏亭）　板谷嘉七（波山）　泉鏡太郎（鏡花）
工博伊東忠太　井上通泰（南天莊）　梅原龍三郎
梅若萬三郎　多忠龍　岡田三郎助
岡本敬二（綺堂）　尾上八郎（柴舟）　香取秀治郎（秀眞）
鏑木健一（清方）　河合又平（醉茗）　川合芳三郎（玉堂）
川端昇太郎（龍子）　川村萬藏（曼舟）　菊池寬
菊池完爾（契月）　北村西望
文博幸田成行（露伴）　幸田延
小杉國太郎（放庵）　小林茂（古徑）
醫博齋藤茂吉　文博佐佐木信綱（竹柏園）　小室貞次郎（翠雲）
佐藤清藏（朝山）　齋藤知雄（素巖）
竹內恒吉（栖鳳）　清水龜藏（南山）　高濱清（虛子）
谷崎潤一郎　橘糸重　建畠彌一郎（大夢）
德田末雄（秋聲）　千葉胤明　津田信夫（大壽）
德富猪一郎（蘇峰）　富本憲吉
內藤伸　中澤弘光　中村不折
西山卯三郎（翠嶂）　橋本關一（關雪）　比田井鴻（天來）
平櫛偉太郎（田中）　藤井浩祐　藤島武二
豐時義　寶生朝太郎　前田廉造（青邨）
松林篤（桂月）　南薰造　三宅雄二郎（雪嶺）
武者小路實篤　安井曾太郎　安田新三郎（靫彥）
山崎朝雲　山下新太郎　結城貞松（素明）
橫山秀麿（大觀）　和田英作　和田三造

主事
本田弘人

沿革及組織

昭和十二年六月二十四日、勅令第二百八十號を以て官制を公布、こゝに帝國藝術院生誕す

帝國藝術院は、院長一人及び會員八十人以內を以て之を組織す（帝國藝術院官制第四條）

院長及び會員は、藝術に關し識見、閱歷卓越する者の中より、文部大臣の奏請に依り、內閣に於て之を命ず。院長及び會員は勅任官の待遇を受く（同第五條）

目的及事業

帝國藝術院は文部大臣の管理に屬し、藝術の發達を圖り、文化の向上に資するを以て目的とす（帝國藝術院官制第一條）

帝國藝術院は藝術に關する重要の事項を審議す（同第二條）

帝國藝術院は藝術の發達に資する爲必要なる事業を行ふことを得（同上）

帝國藝術院は藝術に關する重要の事項に付文部大臣に建議することを得（同上）

文部大臣は藝術に關する重要の事項に付帝國藝術院に諮問することを得（同第三條）

帝國學士院

〔事務所〕東京市下谷區上野公園
電話下谷（83）〇〇四〇

會員及役員

（昭和十三年十二月現在）

院長　理博　櫻井錠二
第一部長　法博　小野塚喜平次
第二部長　醫博　佐藤三吉
第一部會員　法博　土方寧　法博男爵　一木喜德郎
文博　三上參次
法博　美濃部達吉
文博　服部宇之吉
文博　白鳥倉吉
法博　立作太郎
文博　市村瓚次郎
法博　山田三良
文博　吉田靜致
法博　中田薫
法博　松波仁一郎
文博　新村出
法博　神戸正雄
法博・農博　高岡熊雄
文博　高楠順次郎
法博　小野塚喜平次
文博　松本文三郎
文博　松本亦太郎
文博　德富猪一郎
法博　九鬼正治
文博　龍精一
法博　松本烝治
文博　西田幾多郎
佐伯定胤
文博　辻善之助
文博　佐佐木信綱
文博　山崎覺次郎
法博　織田萬
法博　春木一郎
文博　姉崎正治
文博　狩野直喜
法博　高野岩三郎
文博　桑木嚴翼
法博　清水澄
文博　幸田成行
文博　藤井乙男
法博　鹽澤昌貞
法博　河津暹

幹事　法博　加藤正治

法博　林毅陸
法博　上田貞次郎
文博　池内宏
醫博　小金井良精
理博　長岡半太郎
理博　水野敏之丞
理博　本多光太郎
農博　吉川祐輝
理博　今村明恒
農博　鈴木梅太郎
理博　矢部長克
理博　眞島利行
醫博　稻田龍吉
醫博　足立文太郎
醫博　森島庫太
理博　掛谷宗一
醫博　長與又郎
理博　西川正治
工博　田中芳雄
文博　羽田亨
文博　大類伸
理博　田中館愛橘
醫博　佐藤三吉
理博　三好學
醫博　宮入慶之助
理博　丘淺次郎
理博　木村榮
理博　平山清次
理博　藤原松三郎
理博　池野成一郎
醫博　宮部金吾
理博　岡田武松
工博　平賀讓
農博　安藤廣太郎
理博　藤原咲平
理博　片山正夫
農博　麻生慶次郎
法博　牧野英一
法博　穗積重遠
醫博　三浦謹之助
理博　平山信
醫博　荒木寅三郎
工博　伊東忠太
理博　中村清二
工博　俵國一
理博　高木貞治
理博　小川琢治
理博　吉江琢兒
藥博　朝比奈泰彥
理博　神津俶祐
理博　大幸勇吉
理博　谷津直秀
理博　加藤武夫
工博　澁澤元治

組織

（一）文部大臣の監督下にあり、定員一〇〇名、勅任官の待遇を賜はる。これを五〇名づゝ二部に分つ。第一部に屬するは文學並に社會的諸學科に精通せる者、第二部に屬するは理學並に其の

、應用諸學科に精通せる者
(二) 別項『帝國學士院紀要』(歐文)に掲載せられたる研究論文、考案資料、諸報告等は、總て世界學界に於ける當該問題の優先權を確保す
(三) 委員、部員
(イ) 出版委員　加藤正治外　一四名
(ロ) 學術研究奬勵資金運用委員　加藤正治外　五名
(ハ) 帝室制度史編纂部員　三上參次外　一八名
(ニ) 我國と歐洲諸國との交通資料調査委員　辻善之助外　一名
(ホ) 北畠親房及其の子孫の事蹟調査部員　三上參次外　一名
(ヘ) インドネシア慣習法辭典編纂部員　姉崎正治外　四名

目的及事業

學術の發達を圖り、教化を裨補するを以て目的とす。この目的を達する爲め次の事業を行ふ
(一) 會議(總會及部會)を開き、學術及教化に關する事項を審議す
(二) 學術に關する論文、考案資料等を募集し、又會員をして專攻の學科に就き論文提出、又は報告を爲さしめ、以て學術の振興を計ると共に、それ等の文獻を『帝國學士院紀要』として出版し、內外の學會等に寄贈す
(三) 學術上最も卓越せる研究を成したる者に恩賜賞、帝國學士院賞、その他の賞を授け、學術の發達及奬勵を計る
(四) 學術研究費の補助を成し、學術及文化の研究を促進奬勵して、以て廣く一般に研究心を誘導す
(五) 萬國學士院聯合會の一員として、日本に於ける學術上の凡ての機關を代表して萬國學士院聯合會及外國に於ける學術上の諸團體と共同事業及研究をなす

(イ) 聯合會に代表の派遣
(ロ) 共同事業(日蘭交通史料調査、インドネシア慣習法辭典編纂等)
(六) 學術上獨自の調査研究をなす
(イ) 帝室制度史研究及編纂
(ロ) 北畠親房及其の子孫の事蹟調査
(七) 毎年一回院務に關する報告書を文部大臣に提出し、又學術教化に關する諸問に應答す

沿革及既往事業

明治十二年に創立されたる『東京學士會院』が本院の前身である。同卅九年、萬國學士院聯合會に加入を機會に現名稱に改む。四十四年、かの木村榮氏の『地軸變動の研究、特にZ項の發見』に對し恩賜賞の授與を行つて以來、毎年二、三乃至數件づゝの卓越せる研究に對し恩賜賞、學士院賞其他の授賞を行ひ、また多數の研究補助を爲し來つて居るのも大なる事蹟の一である

十三年度主要事業

(一) 授賞　▲(帝國學士院賞)　有機化合物の双極子說の實驗的證明及び之れと分子構造との關係に就ての研究　理博　水島三一郎▲(大阪毎日新聞・東京日日新聞寄附東宮御成婚記念賞)　サボゲニンの構造に關する研究　理博　北里善次郎。担汁酸の化學的及生理學的研究　醫博　清水多榮▲(メンデンホール記念賞)　光波長を規準とする基線測定に關する研究　渡邊襄
(二) 補助研究事項　琉球諸島言語の研究(第三年目)村上直次郎外八二件
(三) 萬國聯合會へ代表派遣(五月、ブラッセルに開催の同會へ織田萬博士出席)
(四) 次の事業をこの年度も引續き行ふ
(イ) 日蘭交通史料調査　(ロ) インドネシア慣習法辭典編纂　(ハ) 帝室制度史研究及編纂
(ニ) 北畠親房及其の子孫の事蹟調査　(ホ) 帝國學士院史資料調査

興亞院文化部

〔所在地〕東京市麴町區隼町一三番地
電話九段（33）四九〇〇

職員

文化部長　松村謙
第一課長　辻誠
第二課長　多湖實夫
第三課長　林安

組織

▲興亞院官制

第一條　支那事變中內閣總理大臣の管理の下に興亞院を置き左の事務を掌らしむ但し外交に關するものは之を除く

一　支那事變に當り支那に於て處理を要する政治、經濟及文化に關する事務

二　前號に揭ぐる事項に關する諸政策の樹立に關する事務

三　支那に於て事業を爲すを目的として特別の法律に依り設立せられたる會社の業務の監督及支那に於て事業を爲す者の支那に於ける業務の統制に關する事務

四　各廳の支那に關する行政事務の統一保持に關する事務

第四條　興亞院に總裁官房及左の三部を置く

政治部

經濟部

文化部

（第二、三號略）

目的及事業

〔興亞院事務分掌規程拔萃〕

△文化部

第一課

（一）支那新政權に對する文化的協力の實施準備に關する事務

（二）民生に關する事務

第二課

衞生、防疫、醫療、救恤に關する事務

第三課

思想、教育、宗教、學術に關する事務

沿革及既往事業

東亞新秩序建設の中樞事務機關として昭和十三年十二月誕生、同月十六日の官報を以て官制、其他關係法規を公布、同時に柳川總務長官以下の人事を發令し、舊貴族院內の假廳舍に於て事業を開始した

十三年度主要事業

分掌事務一切に關する基礎準備の整備竝に全般的事業開始

國民精神文化研究所

〔所在地〕東京市品川區上大崎長者丸二八四番地
電話 大崎 三一一七—三一一九

職員

所長　關屋龍吉
研究部長（研究囑託）　文博　吉田熊次
事業部長（所員）　文博　紀平正美
庶務係主任（事務囑託）　藤井光德

組織

（二部一係に分る）
（一）研究部　國民精神文化の研究に當り、研究の方面に從つて九科に分れ、他に研究會、編輯圖書に關する事務を擔當す
（二）事業部　教員研究科と研究生指導科とに分れ、教員の研究の指導と、研究生の思想上の指導とに當り、他に講習會を催し國民精神の教養指導に當る
（三）庶務係　庶務　會計を擔當
官制による文部省直轄各部に屬し、所員（勅任又は奏任）助手（判任）書記（判任）囑託、雇、等に依つて構成さる。以上職員數約五〇名

目的及事業

國民精神文化研究所は文部大臣の管理に屬し、國民精神文化に關する研究、指導及普及を掌る（國民精神文化研究所官制第一條）

【設立趣旨拔萃】『（略）惟ふに、古來我が祖先は亞細亞大陸の文化を輸入し、之を建國の大精神に據りて同化し、以て新文化を創造し來れり。然るに明治維新以來の顯著なる國運の進展に伴ひ歐米近代文化の攝取に遑なく、動もすれば模倣追隨の輕躁に陥し、彼の據つて立つ根柢に對する認識に十分ならざる憾ありたり。かゝる風潮の窮る所、遂に我が國家生活、家族生活を破壞せんとするが如き憂慮すべき事態をさへ惹起せり。斯の如きは、自ら因り據るべき我が古典文化の光輝ある傳統を忘却せるのみならず、國民生活の統一を破るものにして、所謂思想國難を示現せるものと言ふべし。然れども他面、我が國運の隆盛は、包攝創造不息の力を證示するものなるを思へば我が歴史的精神を闡明し、此の多彩の思潮に歸一する所を與へ、茲に新日本文化の創造建設に努力すべき時代に逢着せるものと信ず。我が國民精神文化研究所は此の創造建設の使命を擔ひて設立せられたるものなり（略）』

沿革及既往事業

昭和七年八月、勅令を以て國民精神文化研究所官制公布、事務所を文部省内に設置、栗屋文部次官所長事務取扱を命ぜられ、同時に所員以下職員十七名の任命あり、こゝに當所創業の端開く。同九月舊東京商大跡假廳舍に移り、研究並に事業に着手、十月、第一期研究員四十七名の入所式を行ふ。翌八年五月、現在の新廳舍に移り、爾後研究並に事業ともに進捗す。同年六月『國民精神文化研究所々報』第一號を發行、翌九年三月『國民精神文化研究』第一年四册を刊行す。同五月廿一日開所式擧行。この月栗屋所長事務取扱に代つて關屋龍吉氏（當時社會教育局長）初代所長に任ぜらる。同六月『國民精神文化類輯』第一輯を刊行。翌十年二月第一回の講習會を開催す同三月『國民精神文化文獻』一を刊行、國民精神文化研究所々報は此の年二月（第七號）を以て終

刊とし、之に代ふるに五月『國民精神文化月報』第一號を、また六月『國民精神文化』第一卷第一號を刊行、さらに十月『國民精神文化講演集』第一册を刊行す。その他事業として行ひ來れる事項中、主要なるものは次の通り

(一) 講習會 (十一年末までに勞務者指導員講習會一回、教育行政關係者講習會三回、實業專門學校教授講習會一回、學校配屬將校講習會二回、全國公立實業學校長講習會一回)

(二) 出版『國民精神文化研究』毎年二回『國民精神文化文獻』十七種『國民精神文化類輯』毎年約七回『國民精神文化講演集』毎年一回『國民精神文化』毎年六回(昭和十四年一月より毎月)『國民精神文化月報』毎月

(三) 講演會 (毎年一回、公開研究發表)

(四) 研究座談會 (隨時、數回)

十三年度主要事業

(一) 教員研究科研究員 養成人員一三〇名

(二) 研究生指導科 異動なし

(三) 講習會 國民精神講座一回、教育行政關係者講習會一回、社會教育主事講習會一回

(四) 刊行物の主なるもの次の通り

(イ) 「國民精神文化研究」 一三種

(ロ) 「國民精神文化文獻」 八種

(ハ) 「國民精神文化類輯」 七種

(ニ) 「國民精神文化講演集」 二種

(ホ) 「國民精神文化」 第三卷 第四號 外四册

團體名索引

五十音順(發音的假名遣による)

(頁)

ア

愛育會 三四一
愛國婦人會 六六六

イ

イスラム文化協會 七七二
一水會 三七三

ウ

哥澤會 四一五

エ

映畫教育中央會 一七三
榮養學會 一三三
園藝學會 一一六
演劇博物館 三八〇

オ

大原社會問題研究所 六三
大阪朝日新聞社會事業團 三六八
大阪毎日新聞社會事業團 三〇八
大藏財務協會 六二四
大倉精神文化研究所 二六
櫻楓會 六七二
溫故學會 九九

カ

海外事情研究會 一
海外協會中央會 七九〇
海軍協會 八二八
海事協同會 三四七
海防義會 二四〇
外務省文化事業部 一八四五
海洋學會 五〇
科學ペンクラブ 一一四
華族會館 五〇四
廓清會 二四六
カナモジカイ 一四
火兵學會 一四七
過燐酸肥料製造業組合 六五二
漢學會 七二

癌研究會 五四
觀世會 四一六

キ

北里研究所 一五二
北支那協會 六九六
教育評論家協會 三九四
協調會 五八八
京都帝國大學經濟學會 一九
京都帝國大學法學會 七一
京都哲學會 一三三
清元會 三九一
基督教女子青年會日本同盟 二四八
勤勞者教育中央會 一八六

ク

軍人援護會 三七〇

ケ

警察協會 一八四
慶福會 三〇六
刑務協會 二〇二
啓明會 四
建國體操ノ會 四四二
建築學會 三〇

コ

興亞院文化部 八五二
工業化學會 一六四
工業組合中央會 五三六
工政會 五七五
皇典講究所 一五四
講道館 四四八
神戸日伯協會 七八〇
港灣協會 五五六
國家學會 五六
國畫會 四〇三
國語協會 一二四
國際學友會 七六二
國際觀光協會 六八八
國際協和會 八一六
國際交通文化協會 七二二
國際商業會議所日本國內委員會 六八六
國際文化振興會 七九二
國際法學會 七三二
國民精神總動員中央聯盟 二六四
國民精神文化研究所 八五四
國立公園協會 八二一

サ

最新工業普及會 六四三
濟生會 三三四
佐藤新興生活館 二五六
佐門會 四一一
產業組合中央會 五七二
產業報國聯盟 二九八

シ

修養團 一九八
史學會 六〇
師範學校長協會 五〇七
斯文會 三六
社會教育協會 二〇八
ジャパン・ツーリスト・ビューロー(日本旅行協會) 五三四
遞羅協會 七一二
春陽會 四二一
昭德會 二五八
昭和塾 二九二
女子教育振興會 一六〇
人口問題研究會 一六
信託協會 六五三
新日本文化の會 三九

セ

生活改善中央會 二一九
精機協會 一五九
生命保險會社協會 六四四
青龍社 三九九
選擧肅正中央聯盟 一九四
石灰窒素肥料製造業組合 五九二
全國經濟調査機關聯合會 五五〇
全國購買組合聯合會 五八二
全國公社債協會 五九八
全國私立大學聯合會 五〇六
全國高等女學校長協會 四六六
全國製絲業組合聯合會 六五〇
全國青年學校振興會 二九五
全國產業團體聯合會 五二三
全國神職會 四七〇
全國自治協會 三四
全國實業教育會 四七二
全國町村長會 四六四
全國聯合高等小學校長會 四五六
全國聯合小學校教員會 五〇八
全日本司法保護聯盟 二五三
全日本體操聯盟 四五〇
全日本佛教青年會聯盟 二九〇
全日本方面委員聯盟 三一二
善隣協會 六九〇

造船協會 六二八

タ

大亞細亞協會 八〇〇
大孝塾研究所 二八
泰東書道院 四一二
大東文化協會 二七〇
對支文化工作協議會 八〇四
大日本映畫協會 三八四
大日本音樂協會 四三〇
大日本織物協會 六〇二
大日本海洋少年團 二五〇
大日本歌人協會 三八六
大日本氣象學會 一七〇
大日本矯風會 一九七
大日本國防婦人會 六七四
大日本作曲家協會 三九〇
大日本蠶絲會 五八四
大日本山林會 五八〇
大日本齒科醫學會 八六
大日本傷痍軍人會 三五〇
大日本淨曲協會 四〇六
大日本職業指導協會 二三二
大日本消防協會 一八八
大日本少年團聯盟 二八八
大日本水產會 六〇六
大日本體育協會 四三六
大日本農會 五四六
大日本俳優協會 四二二
大日本武德會 四三三
大日本紡績聯合會 六〇四
大日本青年航空團 一九〇
大日本繊業協會 六〇九
大日本聯合火災保險協會 五七九
大日本聯合女子青年團 六六一
大日本聯合青年團 二八三
大日本聯合婦人會 六六四
太平洋協會 七五六
太平洋問題調査部 七九八

チ

中央衞生會 三五二
中央教化團體聯合會 二三二
中央社會事業協會 三四四
中央獸醫會 四八六
中央畜產會 六三二
中央乃木會 一八〇
中央滿蒙協會 六九八
中央盲人福祉協會 三三二
中央融和事業協會 三三四
チエッコスロバキヤ協會 七六一
中學校長協會 四六〇
忠勇顯彰會 一八二
地震學會 一四三

テ

帝國學士院 八四八
帝國耕地協會 五七六
帝國瓦斯協會 五四五
帝國教育會 二一一
帝國藝術院 八四六
帝國在鄕軍人會 二七四
帝國自動車協會 六一六
帝國森林會 一一八
帝國水產會 六五八
帝國水難救濟會 三一〇
帝國鐵道協會 五九四
帝國農會 五五八
帝國發明協會 一五六
帝國飛行協會 五五二
帝國文化振興會 二四五
帝國辯護士會 四五五
丁酉倫理會 一三
哲學會 一七二
鐵道同志會 五六四
電氣化學協會 八八
傳記學會 一六一
電氣協會 五二

電氣通信學會　一〇
電信協會　七四

ト

東亞經濟調査局　五三八
東亞研究所　一三〇
東亞考古學會　一〇〇
東亞調査會　七四八
東亞同文會　七二四
東方文化學院　一四四
東亞問題調査會　七二八
東京銀行俱樂部　六四八
東京銀行集會所　六四六
東京俱樂部　五〇二
東京慈惠會　三六二
東京市政調査會　八〇
東京出版協會　四八二
東京人類學會　九五
東京地學協會　一五〇
東京統計協會　五八
東京汎太平洋俱樂部　七六五
東京ロータリー俱樂部　五〇〇
同潤會　三三二
同仁會　七七四
東北更新會　六一八
東北振興會　五六〇
同盟通信社　八二六
東洋協會　七六八
東洋婦人教育會　六六八
童話作家協會　三八八
常磐津研究會　四二〇
德川生物學研究所　九一
都市研究會　一四八
土木學會　九六

ナ

長唄協會　三八二
長唄芙蓉會　三七六
名和昆虫研究所　二、三
南洋協會　七八二

ニ

新西蘭協會　七〇三
二科會　四二五
日亞協會　七八五
日伊文化協會　八一四
日印協會　七八六
日英協會　六八一
日華學會　七四二
日加協會　七一四
日華實業協會　八一九
日華貿易協會　七九九
日洪文化協會　七四五
日濠協會　七一六
日語文化學校　七六六
日支問題研究會　八三
日土協會　七八八
日獨文化協會　七三八
日獨協會(大阪)　七三一
日獨協會(東京)　七五〇
日伯中央協會　七一〇
日墨協會　七三六
日波協會　八一八
日佛會館　七〇四
日佛協會　七〇六
日佛文化協會　七五四
日米協會　七〇九
日葡協會　七五二
日滿中央協會　六九四
日滿文化協會　七三四
日米通商評議會　六八四
日露協會　七四一
日本醫師會　四六二
日本遺傳學會　五一
日本衞生會　三二六
日本榮養協會　九二
日本エスペラント學會　二四
日本音聲學協會　四四

日本海員掖濟會　三三八
日本學術振興會　一三八
日本學生航空聯盟　八四
日本火山學會　四七
日本機械學會　六八
日本基督教青年會同盟　二一四
日本基督教文化協會　二一六
日本基督教聯盟　二七七
日本俱樂部　四八五
日本外交協會　七〇〇
日本化學會　八
日本經濟聯盟會　六三六
日本計理士會　四八八
日本結核豫防協會　三三〇
日本言語學會　七八
日本建築士會　五五五
日本犬保存會　八二四
日本工學會　四二
日本工業協會　六一〇
日本工業俱樂部　六五四
日本航空學會　四〇
日本廣告俱樂部　五一六
日本廣告聯盟　四七八
日本鑛山協會　六一二
日本弘道會　二〇四
日本交通協會　五四〇
日本國際協會　七一八
日本國民禁酒同盟　二三五
日本古武道振興會　四三八
日本作歌者協會　四〇四
日本雜誌協會　五一四
日本產業協會　五六二
日本齒科醫師會　四七四
日本詩人會　三七八
日本兒童劇協會　四〇八
日本兒童文化協會　一七七
日本商工會議所　五四二
日本釀造協會　六五九
日本小兒保健研究會　一三四
日本少年教護協會　二三八
日本植物學會　一六二
日本人絹聯合會　五六六
日本新聞協會　五一二
日本水產學會　一二九
日本水上競技聯盟　四四四
日本數學物理學會　六二
日本西班牙協會　七四六
日本製紙聯合會　五八七
日本成人教育協會　二〇六
日本青年館　二八〇
日本青年協會　一九二
日本赤十字社　三五四
日本船主協會　五六八
日本倉庫協會　五二九
日本速記協會　四九〇
日本體育保健協會　四四〇
日本中央蠶絲會　六四〇
日本地理學會　四六
日本庭園協會　三九二
日本鐵鋼協會　五三二
日本丁抹協會　六八二
日本動物學會　一〇六
日本天文學會　七
日本糖業聯合會　五二〇
日本刀鍛錬會　五四九
日本圖書館協會　四六八
日本日曜學校協會　一七四
日本農學會　六四
日本農藝化學會　六六
日本能率聯合會　二
日本俳人協會　三七四
日本博物館協會　四八〇
日本美術院　四一八
日本美術協會　四二六
日本舞踊協會　四二四
日本文化協會　二三〇
日本文化聯盟　八三一
日本文化中央聯盟　八三三

日本ペン倶樂部 四〇〇
日本辯護士協會 五一〇
日本貿易協會 五二五
日本放送協會 八二三
日本民族衛生協會 一〇二
日本民俗協會 一六八
日本藥學會 六一
日本藥劑師會 四五八
日本幼稚園協會 二〇一
日本羊毛工業會 五九七
日本ラテンアメリカ協會 七七〇
日本林學會 一一三
日本力行會 二六〇
日本冷凍協會 六〇〇
日本勞働科學研究所 二〇
日本ローマ字會 三三
如水會 四七六

ノ
農學會 一一〇
農業報國聯盟 二九六
農事電化協會 六二六
農村工業協會 六二〇
農村更生協會 五七〇

ハ
白十字會 三六五
服部報公會 三〇四
原田積善會 三〇三

ヒ
評論隨筆家協會 三八七
比律賓協會 七七六

フ
福田會 三五八
佛教聯合會 二二四
富民協會 六三四
文藝家協會 四二八
文明協會 一三六

ヘ
辨理士會 四九二

ホ
法學協會 一七一
邦人社 二七三
法曹會 四七二
輔成會 三一四

マ
滿洲移住協會 八一三

ミ
三井報恩會 三三九
三菱經濟研究所 五三〇

メ
明治神宮體育會 四五二
明治聖德記念學會 七六
明治文化研究會 一六七

モ
森村豐明會 三三七

ヤ
安田修德會 三一七
山田流箏曲協會 三九六

ヨ
浴風會 三一八

ラ
獺豫防協會 三六〇

リ
硫安肥料製造業組合 五一九
理化學研究所 四八
糧友會 一〇八
林學會 一〇五

昭和十四年七月十日印刷
昭和十四年七月十五日發行

〔日本文化團體年鑑〕
定價金貳圓

東京市麹町區內幸町二丁目大阪ビル新館
財團法人 日本文化中央聯盟內
編輯兼發行人 田口章太

東京市下谷區二長町一番地
印刷人 井上源之丞

東京市下谷區二長町一番地
印刷所 凸版印刷株式會社

不許複製

發行所 財團法人 日本文化中央聯盟
東京市麹町區內幸町二丁目一番地ノ三
大阪ビル新館
電話銀座(57)一一八七番
振替東京一四二、八三四番

14·5
810

終